
ウィンの月世界旅行

小田中 慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウインの月世界旅行

【Nコード】

N0246I

【作者名】

小田中 慎

【あらすじ】

月・アームストロングシティ。ホテルのラウンジでシャンペンをストローで飲む男。窓があり地球が見えると評判のホテル。1ヶ月の休暇を愉しむ男の名はウインスラブ・・・TP TC読まなくても楽しめる、はず？

プロローグ

***TP TC Episode 05 . 5
Moon Stranger

南米連邦・アルゼンチン・サンタクルス州
2374年06月（現在年月）

ガツ。ガツ。ガツ。

シャベルが大地を刻み、乾いて脆い赤土の山を築く。淀みなくシヤベルを振るう者は小柄で遠目には少年に見える。だが、その横顔を見やれば、きつい顔立ちの30になるうかという女性だと分かる。褐色の肌は何の表情も浮かべない顔。その動きはロボットのように無駄がない。

吹き渡る風は思わず身震いするほど冷たいが、我慢出来ないほどではない。その風が彼女のテントもバタバタと音を立て波打たせ、同じ風は彼女の長袖シャツをはためかせ、短い髪を揺らす。シャベルを赤土の山に突き立て、厚い作業用の手袋で軽く額を撫でると、彼女は空を見上げた。

空は高く、青い。乾燥した大地の上は巻雲に彩られた深い青。日差しは眩しいが強くない。大地の畝は見渡す限り360度どこまでも広がり、所々に低い灌木と叢が見えるだけ。人の気配はどこにもない。正に何も無い場所だった。

最初に彼女がここへやって来たのが7年前。以来、1年に一度はやって来ている。相棒たちの眠るこの場所は、彼女にとっての聖域だった。

周囲より僅かに小高い丘の上。彼女は携帯端末ピシーの擬似窓を開く。
中空に三次元偽像ホログラムで現れたキーボードを叩き、暫く掘った穴を見つめていたがやがてウィンドウを閉じ、荒地山岳走行用の2人乗りホ

バーの荷台からゲル状遅延硬化可塑性材料の小型ドラム缶を転がし降ろし、バーで蓋を抉じ開ける。旧式のクランク付きポンプを開けたドラム缶の穴に嵌め、掘ったばかりの穴の底にゲルを注ぎ込む。ゲルは穴の底に浸み込みながらやがて溜まり始め、それが平坦になると彼女はポンプを止める。

再びホバーに向かうと遙々ブラジルの奥地から荷台に載せて来た一抱えほどの立方体の梱包を解く。中から現れたのは艶やかに黒光りする御影石。彼女は既にスリングロープで玉掛けされていた石をホバーに取り付けられた簡易作業アームで吊り上げ、掘ったばかりの穴の上に位置を合わせながらゆっくりと降ろす。計算通り御影石の塊は穴にすっぽりと嵌った。

出来栄えを眺めた後、位置を決めたばかりの御影石の周りに丁寧なゲルを注ぎ込むと、それは地面に注がれるや乾いた大地に浸み込んで行く。滲み出るようにゲルが大地から顔を覗かせるまで彼女は御影石の周りに注ぎ続けた。

やがて石の周りがとろりとしたゲルで溢れると鏝でゲルの形を整え、荷台から散布機を取り出し、シャワーノズルから硬化促進剤をゲルに吹きかける。すると瞬時にゲルは固体になり、石を囲む土台となった。

「クイーン。ちょっとごめんよ」

彼女は独り呟くと、石の一角を編上げブーツで踏み付ける。石はびくとも動かなかった。出来栄えに満足すると彼女は散布機を外し手袋を脱ぎ、ウエスを取り出すと石の表面を丁寧に拭う。特に石の真ん中に嵌め込まれたメタルの銘板は時間を掛けて埃を払った。

そのメタルは唯の金属ではない。職務中に斃れた彼女の『相棒』、ピッカーと呼ばれる人型汎用思考端末、即ち高機能ロボットのボディの一部を溶解して作ったものだった。

彼女は銘板を曇り一つなく磨き立てるや運転席に行き、助手席に置いてあった一輪の白い薔薇を取る。御影石の上にそっと置き、風に飛ばされぬよう、これも相棒のボディから作った重石を置いた。

彼女は膝を折ると頭を垂れ、手を握る。そしてそのまま数分間、身動き一つしなかった。

彼女の右側には、今設置したばかりの石と全く同じ御影石が一行に等間隔で4つ並んでいる。その上には等しく一輪の白い薔薇。表面処理を施してあり、物理的に破壊しない限り半永久に咲き誇る。銘板に刻まれた墓碑銘^{エヒタフ}は年記を除いて全て同じだった。

『クイーン 誠実なる者 ここに眠る 23 x x 23 x x』

彼女は祈りを終わると道具を片付け、ホバーの荷台に放り込む。ふと高い空を見上げ、眺め渡した。風が唸りを上げてその顔を撫でる。巻雲の間に青白く薄く輝く上弦の月を認めると、それまで無表情だった顔に穏やかな、ほんの微かな笑みが浮かんだ。

(ウイン。愉しんでいるかい?)

1：月面ジャンプと老嬢

月面・国際協約機構直轄・ガガーリングレード

2374年06月（現在年月）

まずはマナウス・シャトル発射場から地宙間シャトル便で、静止軌道に乗る国際協約・第2スペースターミナルへ。そこで月とターミナル間を往復する1日5便発着の旅客往還船に乗り換える。ツーリストクラスの狭い個室に丸3日間。船外カメラで常時映し出されている、次第に大きくなって行く月と次第に小さくなって行く地球も見飽きた頃に、漸くランディングダウンの案内が入る。往還船は旅客用エアプレーン型。乗客は地球におけるエアプレーン型の着陸同様、シートで大人しくしているだけであっけなく月に到着した。ウインスラブにとって月は初めての経験、否、宇宙へ出たのも初めて、いわゆる『過去人』の彼にとっては痛快な経験になった。

19世紀のフランス。下級貴族の三男として生まれた彼・ウインは現在年紀10年前、1870年の普仏戦争に騎兵として従軍、プロイセンに包囲されたセダンの戦場で瀕死の重傷を負って見捨てられていたところを突然現れた3人の『未来人』に助けられる。見たことも聞いたこともない奇妙な手当てを受け、注射器と思われるものを腕に刺されるや意識を失う。気付いた時には目の前に女の顔があり、眩しい光に照らされてまだ朦朧としている彼に信じられないことを次々と話した。

曰く、自分が選ばれたこと。ここは未来で24世紀だということ。これから過去の自分に戻るか、未来で過去を守る任務に就くか選ばなくてはならないこと、等等・・・

今や彼の中でも笑い話だが、暫くは宇宙人にでも拉致された悪夢

を見ているものと思っていた。それほど彼の知る世界と未来はかけ離れていたのだ。

そのかけ離れた世界にも次第に順応し、3年後にはマシンに乗って過去へ行き、TCと通称される時空犯罪者を追っていた。今やすっかり未来人のウイン。もちろんあの時、申し入れを断って過去に帰ったのなら例え生き残ったとしても、宇宙はおるか空を飛ぶことも出来たかどうか怪しいものだ。

およそ1ヶ月間の休暇を月旅行に充てていた彼は往復6日、検疫と時差など3日を除いた20日間の月滞在を申し込んでいた。忙しい仕事柄、2度とこんな時間は持てないかも知れない。それに最近のゴタゴタに嫌気も差して、文字通り地球を飛び出した訳だ。

月へ向かう旅客往還船での3日間は、何もすることがなく個室や共用スペースをぶらぶらするだけの退屈な時間ではあったが、物珍しさと宇宙空間の神秘に圧倒され、思いのほか早く過ぎた。月へ着いてからは義務付けられている36時間の検疫兼月環境慣習ガイダンスがあり、誰もが例外なく拘束される。

この拍子抜けするような足止めも、ガイダンス中は面白おかしくレクチャーする講師たちの話に興味深く聞き入り、待機時間は北米同盟から来たというブロンドとブルネットの愉快的な娘2人組と話が盛り上がって楽しく過ごすことが出来た。

晴れて検疫と環境慣習が終了すると、ウインは早速観光に出掛けた。不案内な現地で見栄を張るのは止め、案内所の親切な女性が勧める人気の高いガイド付き『初めての月世界ツアー3日間』を申し込む。

ツアー最初の見学地は、彼が降り立った月の玄関と呼ばれる月最大のスペースポートがあるガガーリングレードの体育館。確かに月面では巨大構造物の部類だが、地球では大都市に必ずと言ってよいほど見受けられるアリーナ式競技場に過ぎない。月面の諸コロニーがほとんど地下か半地下式に建設されているため、天井が透明のド

ーム構造で宇宙が見えるというのは確かに珍しいが、それ以外これと言って見所がありそうに思えない。

可愛らしい女性ガイドが滑らかに説明する。

「この建物はガガーリングレードでも一番大きな建物で、24ある月面拠点でも4番目に大きな建物です。2270年に完成した当時は2番目の大きさでした。建設には当時月面の工場であつたブラウンシティの工作機能だけでは間に合わず、地球から輸送船延べ250隻により運び込まれた部材により5年の歳月を掛けて組み立てられました。特に天井の直径20メートルのドームは6メートルの厚さがある強化超クリアカーボン製で、断熱効果も抜群です。万が一割れたとしても瞬時にシャッターが覆い、中には影響が及ばないようになっています」

ガイドの誇らしげな声とは対照的に、彼と50人余りの年齢も所属地域も様々な人々からは、戸惑いと失望の混じつたざわめきが漏れる。

すると・・・

「では、皆さん、ここで私のアクロバットをご覧頂きましょう！」

小柄なガイドはそこでききなりジャンプすると、彼女の身体は壁に向かって地球ではあり得ない『飛行』をし、壁に達すると壁に付いている多数の突起を伝つて更に高みを目指す。啞然とする人々の前で彼女は、あれよあれよと言う間に天井のドームに張り巡らされたトラスに乗った。そこから手を振ると降下、アールを描いた壁を伝いながらまるで猿のように身軽にツーリストの前に着地する。誰もが拍手をするのに躊躇しなかつた。

「さあ、只今のアクロバットはさすがに皆さんでは直ぐには無理です。とはいえ、私も月に来て2年足らず。短期間でどなたもコツを覚えることが出来ますよ。今日はその第一歩として月面ジャンプを皆さんにお教えしましょう！」

気の早い一人がジャンプするが、地球上と同じで数十センチ飛び上がっただけで落ちる。それも当然、月に慣れていないツーリスト

らが、天井や壁にぶつからないよう6倍のGが掛かる擬似重力場発生装置が腰についているのだ。

「早速試しましたね？でも、重力発生装置を切らないと出来ません。皆さん、いいですか？良く聞いて下さい。順番に私の前に並んで下さい。まずはこのヘッドギアとプロテクターを着けて頂きます。怪我をしてからでは遅いですからね。その後、私が重力発生装置のプロテクトを外しますから、私の指示を良く聞いて・・・」

地球の6分の1という重力、それだけを取ってみても愉快この上ない。最初に宇宙へ出た人々が必ず行なう儀式、空中浮遊に次いで人気の高い月面でのジャンプ。

スプリングボードの補助で身長の数倍ほどの高さまで飛び上がり、羽のように軽く着地する。それが可能なようにわざわざ造られた体育館。今ではお馴染みのムーンバスケットや月オリジナルの球技、ムーンボールの競技場となっている。先ほどガイドが伝った壁の突起やドーム中央のトラス構造はムーンボールで使うものだった。

そのエキサイティングなムーンボール観戦や最初期の月面着陸地点観光、酸素や水を月の砂レゴリスから取り出す工場や農場、太陽光発電所など月面活動維持に欠かせない諸施設の見学、[↑]連絡船トランシリンに乗って体験する月の裏観光や地球の出鑑賞など、3日間は盛り沢山の内容で、あまり期待していなかったウインも大満足だった。

月観光の後は、月のニューヨークと呼ばれる最大のコロニー『アルテミス』を訪れる。定住人口1万1千。月の総人口5分の一を占め、形骸化した国連に代わり地域間の友好と世界規模の諸問題を扱う国際協約機構の月政府本部や行政機関も集中していた。正に月の『首都』である。

ウインは社交とはいえ、まずはやらねばならないことをする。自分の『^{カンパニー}会社』の『支部』に顔を出すと、あまり気の乗らない儀式だった。

その支部は国際協約機関の出先事務所が集められた合同庁舎の一角にあった。庁舎といつても月のこと、ドーム型のポッドを放射状に組み合わせ、半地下式に設置された何の特徴もない建物だった。その中でも小さい部類と思われる部屋にそれはある。ウインがスライドドアを潜ると直ぐに壁で、4つの銘板がこの狭い部屋を4つの国際協約機関が共用していることを示していた。曰く、国際警察機構、国際検察庁、国際司法裁判所、そして時空保安庁。彼は壁の自分の組織を記した銘板の下に三次元動画で浮かび上がるボタンを押す。

「はい、何でしょう?」

ホログラムは変化して、制服を着た痩せた中年女性の姿を表す。

「私はピエール・ド・ウインスラブと申します。地球から5日前にやって参りました。ケリガン駐在官はいらっしゃいますか?」

「申し訳ありません、彼は今外出しております。お約束でしたでしょうか?」

「いえ、アポイントメントは取っておりませんでした。突然押しかけた私が悪いのです」

「分かりました、暫くお待ち下さい」

女性が消えると、「暫くお待ち下さい」の文字と丸い月の偽像がゆっくり回転しながら現れる。ウインが月の立体地図を眺めていると、壁の一部が消失して、そこに先ほどの女性が現れた。もちろん、この壁は単なる偽像で狭い部屋の目隠しになっている。

「ウインスラブさん?」

「はい」

「ようこそ月へ。私はミッチェルと申します。御用を受け賜りましたよう」

「いえ、ただ月に来たのでご挨拶と思ひまして。私はTP作戦部で働いております、ウインスラブ中尉5184352です」

「まあ。それはご丁寧ありがとうございます。ケリガン中佐は『アポロイレブン』へ行ってますわ。ここから200キロほど北の町

ですけれど、生憎夕方までは戻りません。わざわざお越し頂いたのに、ここの事務所の他の人員は私ともう一人の秘書官だけです。何もして差し上げられなくて。何かお困りなことでもありませんか？彼に連絡をとりましょうか？」

19世紀のウインなら老嬢と呼んだであろうミツチエル女史が探るように上目遣いをしたので、ウインは慌てて、

「いえ、大丈夫です、本当にご挨拶に伺ったままで、すると老嬢は品定めをする目付きで、

「ごはんはちゃんと食べてます？月は地上と違って食べ物が美味しくないから・・・」

「ああ、いえ、そんなことはございませんよ、美味しく頂いてます」

「そうお？ならよろしいけれど・・・最近はそのことは少なくなつたんですけれどね、3年前に連絡船が隕石群に突っ込んで遭難した事件の時は2週間も食料の供給が途絶えてしまって、それは大変だったんですよ。毎日毎日、国際協約駐屯軍放出の備蓄食料を出されて、あの口糧とかいうものですよ？ああ、あなたは作戦部の方だから知ってますよね、あれは私のような女には・・・ああ、こんなところで立ち話も何ね、失礼しました、どうぞこちらへ」

嫌な予感のウインは慌てて、

「いえ、お忙しい職務の最中です、私はこれで」

「そんな、お気になさらず、いえ、今日はさほど忙しくないですよ、ケリガンもいないし、ルーシーはお休み、ウインさん、ぜひ地球の話をお聞かせくださいな。どうぞ寄っていらして」

ウインが、ケリガン中佐によくお伝え下さい、と早口で言い、放々の体で連絡事務所を後にしたのは一時間も後の事だった。TC・時空犯罪者が月へ逃亡する可能性はゼロとはいええず、また、今のところ月にマシンを持ち込む輩は登場していないものの、万が一を考えて開設された支部だった。そんな希薄な開設理由。たった3名の

人員。駐在官のケリガンは情報部所属だが何かドジをして飛ばされた、とも聞かされていた。つまり、月支部は他の国際協約機関が事務所を出しているからウチも、とTP・時空保安庁が権利を主張し見栄を張った結果に過ぎない。なるほど、いかにも嗜好き・世話好きなきなミツチエル女史が退屈するはずである。

2：シヨツピング

月面・国際協約機構直轄・アルテミス 同年紀

思わぬ時間を支部で過ごしたワインは、昼食を『何時でも・どこでも・宇宙でも・変わらぬ味とサービス』の看板が輝くバーガーシヨツプで簡単に済ませることに決めた。

ミツチエル女史には話の都合上食べ物は気にならないようなことを言ったワインだったが、月の食事は確かにあまり褒められた味がない。フランス貴族出身の彼は食事に関して一家言持っていた。地球では仲間と連れ立たない限り決して自分から立ち入ることがないバーガーシヨツプに入った理由も、『変わらぬ味』とやらの惹かれただけだ。

入り口のスライドドアが開くと、ワインはつと立ち止る。店内は観光客と風変わりな服装をした月の若者で溢れていて、古風なストライプのスーツを着て首に黄色のスカーフを巻いた彼は多少浮いて見えた。軽く肩を竦めると、入り口にたむろする若者にぶつからぬよう身体を横にして入って行く。

店内に入った途端、彼の携帯端末の疑似窓が勝手に開く。「ようこそ」の文字が躍り、メニューが現れる。確かにメニューは地球上どこへ行ってもお目にかかれるバーガーシヨツプとそっくり同じものだった。違うのは値段で、いわゆる『宇宙値段』、もつとも人気があるダブルチーズバーガーセットが6UNE50セントもする。およそ地球の倍だ。ワインは顔を顰めると画像に触れ、ダブルバーガーのオニオン抜きとミネラルウォーターをチョイスする。注文完了の印に疑似窓が赤い番号札に変化する。彼はざつと辺りを眺め、まずまずの広さの店内で最も人が少ないと思える奥のトイレ近くに席を見つけた。

席に座るなり腰に付けた重力場発生装置を起動させ、地球の椅子

に比べるといやに背凭れの高い椅子に背中を押し付けた。シートベルトが揺れていたが、そんなものをするつもりはない。月の条例では『入管』後3日間はポータブル重力場発生装置を身に付けなければならぬが、彼がそうであるように、その後も身に付ける人間は多い。重力差に大分慣れて来たウインだったが、こうして腰掛ける時には装置を入れた。意識しないと腰が浮くように安定せず落ち着かない気分させられるからだった。

彼は暫く背凭れに身体を預けて店内を見渡していた。観光客の雑談と時折混ざる若者の奇声や笑い声で、今や殆ど夢の中の出来事のように思える生まれ故郷の19世紀、ナポレオン3世時代のパリを思い浮かべる。酔っ払いの高声と娼婦の嬌声、ニンニクの臭いとアルコール、むせ返る煙草の煙で満ち満ちていた場末のバー。もちろんここにはアルコールはなく、一世紀以上前に煙草も消え失せてしまった。あそこからなんと遠くまでやって来たことだろう。

ふと見ると番号札が点滅し「お待たせしました」の文字が浮かぶと、同時に中空を小型のトレイ型ホバーが滑るように飛んで来て彼の前にふわりと下りた。乗っていたトレイごと注文のダブルバーガーオニオン抜きとミネラルウォーターのパックを取る。同時に『番号札』が『5ユニ25セント頂きました。毎度ありがとうございます』に変わり、彼が軽く触れると消え、ホバーも飛び去った。

ハンバーガーの味は確かに地球と変わらない。正真正銘地球から持ち込まれるミネラルウォーターは、月面の工場で月の砂『レゴリス』から取り出される『月の水』と違い、舌に優しく妙な臭いもない。彼は踊るように飛び跳ねふざけている若者たちをぼんやり眺めながら、背凭れの高い椅子に沈み込み、ゆっくりと食べた。

バーガーショップを出ると『アルテミス』の街路を宛てもなく歩く。それはこの『街』^{コロニー}のメインストリートだったかもしれないが、『道』ではなかった。幅4メートル、天井が高い広い廊下と呼ぶ方が地球人にはしっくりとくるだろう。街をブドウの房に例えるのな

らば、道は果実を繋ぐ枝、その中央、一番広く一番通行人が多い通路といったところだ。

しかし、アルテミスはやはり月の首都、この通路も所々休憩所が設けられ、通路の分岐点や大きめの建物の入り口付近には月面を臨む窓も設けられている。通路の両側には様々な店舗が並び、ショッピングモールと呼んでも差し支えない。住民のための店もあれば観光客目当ての店もある。月はこの地域にも属さない国際協約地域なので基本タックスフリーだ。地球上にもいくつもある協約地域や月以外のスペースコロニーがそれを売り物にショッピング目当ての客を呼び込むように、月でもブランド店や土産物店が並んでいる。

だが、スペースコロニーやスペースステーション、月など宇宙で買い物をして地球に持つて帰るのでは結局余計に金が掛かる。地球と違い宇宙では手荷物などと言うものはない。全てが有料荷物で、それも容積と重量両方で計算される。第一、旅客も大人子供の違いだけでなく体重、身長で料金差があるくらいなのだ。

そのため必然的に宇宙土産は軽く小さなものが好まれる。そうになると俄然人気は装飾品で、チェーン、リング、ピアス、カフス、ブローチ、ピンバッチなどが良く売っていた。もちろん、ブランド品も人気だがやはり土産物、その地区特産の何かを象った物や地球に持ち帰っても検疫や税関で没収されない安全な鉱物などを使った商品も人気がある。

ウインはふらりとそんな土産物を扱うノンブランドの装飾品店へ入った。

「いらつしゃいませ」

すらりと背の高い女性店員がぺこりと頭を下げる。ロボットを見慣れたウインには直ぐに3次元偽装を施したロボットだと分かるが地球と違い月では店員の殆どがロボットだと月到着後の慣習ガイドンスで教えているので、月の常識といえる。

「ここでは土産に何が人気だね？」

ロボットは実に自然な笑みを浮かべる。例の喜怒哀楽24種類の

表情を記憶させたお買い得品ではなく、顔面筋がヒトを模して忠実に作り込まれている。主に宴席酒席で相手をするコンパニオンを想定し開発された高級品。手を抜かず結構高いものを使っているな、とこの店を見直した。

「レゴリスを使ったものが良く出ておりますが・・・」

思わず見とれてしまう微笑を浮かべたロボット。当たり前だ、この手の高級接客用ロボットは人間が作る最高の表情を模してプロگرامされている。可愛らしく小首を傾げると、

「月は初めてでいらっしやいますか？」

「そうだ」

「どのような方に差し上げるのでしょうか？」

冷やかしのつもりだったワインは衝動的にここで買おう、と決めてしまう。

「30になる女性、20の男性、後、18の女性と40代の男性・・・」

・25くらいの男性。5人だ」

ロボット店員は一瞬情報を咀嚼する時間ラグを取ると、

「それぞれの方に何かご希望はございますか？ご予算は？」

「希望は特にない。予算は5つで10万UNEユニ以内。君が適当に見繕ってくれないか？気に入らなければその都度言っよ」

「承知いたしました。どうぞこちらへ」

ロボット店員はワインをカウンターの一角に案内し、座らせる。

もちろん彼は直ちに重力場発生装置を作動させた。

「最初に30になる女性の方に」

ロボット店員はカウンターへビロードを張ったトレーを置き、その上にいくつか装飾品を並べると、

「レゴリスを使ったペンダントなどいかがですか？」

月面を覆う微細粒物質レゴリス。いわば月の砂だが、それから雑成分を取り除いたものを砂時計（地球の重力にあわせてあるので月では使えない）や溶解して固めアクセサリーにしている。ロボット店員が見せたものはレゴリスの輝石成分を強調し光を反射して美し

く輝くものや、虹のような光沢の斜長石を組み合わせたものなど、中々に目を引くものだった。しかし、彼の知る『30になる女性』はこのように目立つものは好まない。

「悪いが、他のものを。もっと小さいものでいい」

「暫くお待ち下さい」

店内には他に10人ほどの客。誰もが観光客と分かる出で立ちで、それぞれにロボット店員が対応している。よく見ると男性客や若い女性客にはウインと同じ女性タイプが、中高年の女性客には男性タイプのロボットが付いているのに気付く。客によって店員のタイプを自然に変えている。なるほど、こんなところにも商売の哲学が生きている。ウインが一人笑うと、彼に対応するロボット店員が戻って来た。

「女性の方はピアスをしていらっしやいますか？」

「普段はしないがフォーマルな席ではそうしているのを見たことがある」

「では、こちらなど、いかがでしょうか？」

ロボットがビロードの上に並べたのは5種類の小さなピアス。意匠はオーソドックスで控えめ、円形の金枠の中ガラス状の石が輝いている。石は色違いで赤・緑・紫・青・透明、金の枠も微妙に形が違ふ。

「どうぞお取りになってご覧下さいな」

見惚れていたウインははっとして視線をカウンターの左右へ飛ばす。ロボットの表情に戻ると相変わらず自然な笑顔が浮かんでいる。

(プログラム外だな、遠隔操作だ)

しかし脅威と言えるものは見当たらず気配もない。ウインが冷やかにでなく本気で買おうとしていること、機転を必要とする客であることを見抜いた『生の』店員が本腰を入れて対応しようとしている。

「なかなかいいね。君ならどれを勧める？」

ロボット店員は一瞬笑顔のまま動きを止める。それはほんの一瞬

だったがオートがマニュアルに切り替わった瞬間をウインは見逃さなかった。

「そうですね、ワタクシならこれを」

ロボットが白く細長い指で取り上げたのはワインレッドにきらりと輝く品物だった。30になる女性、としか情報を与えていない。ウイン自身は一番無難な透明を考えたのだが。よくよく考えてみれば深く濃い赤は褐色の肌を持つ彼女に似合いの色だ。

「いいね。それにしよう」

彼はウインクしてみせる。ロボットは微笑を深くして頭を下げる。彼は己が認めた専門家の意見には素直に従うべし、という経験から得たポリシーを持っていた。

20分後に全ての品物が揃い、ラッピングされた5つの小箱がトレーに載せて運ばれて来た。これもプロの意見を尊重して何も希望を伝えなかったのに、それぞれが貰って喜ぶであろうラッピングが施してある。

即ち、30女性用のプレーンな黒、20男性の赤、18女性はホルグラム処理で派手に色が変化するラッピング、40代男性の月面をあしらったラップ、そして25くらいの男性用にはシックな木箱に金色の細いリボン。

「ありがとう。実に見事だね」

ウインが思わず小さな拍手を贈るとロボットは頭を下げ、隣に立った人物がにこやかに、

「ご満足頂けましたでしょうか？」

「ええ、手間を掛けて申し訳ない」

「ありがとうございます。ではご会計を」

中年の店員は中空に擬似窓を開き、彼に差し出す。彼が受け取るとウインドウの下に擬似ボードが現れ、IDとパスを問う。打ち込むと現れた数字に彼は、

「随分安いね。安物をチョイスしたのかい？」

「滅相にありません。本当の金額は・・・これです」

『生の』店員が手を差し伸べて擬似ボードを叩くと現れた数字は最初の数字のほぼ倍近く、彼の告げた予算の50%増しの数字だった。ウインは笑うと、

「開店セールか何かだったのかな」

「そのようなものです。お客様は月は初めてでいらっしやいますでしょう？サービスですよ」

「何か気味が悪いね」

「ご不快でしたら変えますが」

「もちろんそのままでもいいよ」

ウインは素早くボードに『サイン』すると擬似窓を渡す。店員は軽く頭を下げると、

「ありがとうございました」

やり取りの間にロボットが土産を古風な手提げ袋に詰めていて、彼に渡す。

「ありがとう、キミの対応もよかったよ」

「ありがとうございました。お気を付けて」

ロボットは例の笑みを浮かべて深く一礼する。

「ああ、そうだ。あなたの名刺を頂けないだろうか？」

ウインは中年の店員に声を掛ける。

「かしこまりました」

店員は擬似窓を開き彼に渡す。彼はちらりと画面を見やると閉じた。ウインドウは瞬時に消え去る。

「地球に帰ったら仲間にこの事を教えるよ。中々心得た店主がやっている、とね」

店主は満面の笑みで返した。

「そう言って頂けると期待しておりました」

ウインは笑って手を振ると、深々と礼をするロボットと人間を後に店を出た。

3：ホテル・アーケティック

月面・国際協約機構直轄・アームストロングシティ

2374年06月（現在年月）

翌々日、月滞在1週間目になる日の『昼下がり』、ウインは『北極域』行き連絡船に乗り込む。南極域にあるアルテミスの反対側に位置し、月で3番目に大きく2番目に建設されたコロニー『アームストロングシティ』に向かった。宇宙に出て10日が過ぎ、昼と夜は時間だけで判断することにも漸く慣れた彼は、窓から延々と続く岩と砂だらけの荒地を眺めていた。宇宙は真の闇。擬似的に青い空を映すスペースコロニーと違い、月にはなんの偽装もない。散らばる街の一つでは、広場の天井に空を映し、暁から夕焼けまでを見せるイベントを行なっていると聞く。ウインは宇宙に出て10日あまり、確かに青い空が恋しくなってきた。

ポートからホテル行き直行の大型15人乗りランドクルーザーに乗り、ちよつとしたアトラクション気分で月面走行を楽しんだ後、『夕暮れ時』に1週間ほど滞在する月でも屈指の3つ星ホテル、アーケティックホテルに着いた。

このホテルの売りは眺望にあつた。昼側は100度を越え、夜側は-150度を下回る月では建造物は地下に造られるか、月の地面を覆うレゴリスで覆って遮温するのが常識のため窓は極端に少ない。一般に『窓』と呼ばれるものもほとんどが擬似窓で、外の風景をライブ映像として流すスクリーンに過ぎない。それをこのホテルでは本物の窓から生の月世界を見せようというのだ。

ホテルの本体は地下にある。30ある客室は内装こそ豪華だが月での標準居住区と同じく窓のないカプセル状の個室。だが、ラウンジとホールは地上に露出しており、全周360度見渡せる円形、そ

の角度15度毎に小さな窓が切つてあつた。人々は24時間無料で供される地球から送られて来たシャンパンやビール片手に荒涼とした月世界を、地平から覗く青く輝く地球を見て、歓声を上げるのだ。そんな窓の一つから、ウインはシャンパン片手に地球を見ていた。

宇宙に出て人間は変わる、と言われる。

地球を外から眺めた人間は神の目線で地球を見ることにより宗教感に目覚め、小さな存在である人間を識^しる。宇宙開発が始まつて400年、人は火星に拠点^{テリトリー}を作るまでになつた。複数の引力均衡点^{ラグランジュポイント}にも半永久的なコロニー群が建設されている。宇宙移民人口は既に150万人を数え、延べにすれば1000万を越えた。21世紀末に始まつた移民は当初、爆発的な人口増加の救世主のように思われていたが、いくつかの世界規模の戦いにより世界人口は大幅に減少、その後、今やどの地域も導入する『人口抑制策』により安定化を果たしたので、宇宙への移民は増加人口のはけ口ではなくなつている。だからこそ、宇宙はフロンティアとなり仕方なしに地球を出て行くのではなく、そこには挑戦するために出て行くという気概がある。

(『外』に出れば考えが変わる、そう聞いたがな・・・)

別段、何の感慨もないな、とウインは思う。過去、多くの宇宙飛行士や開拓者が覚醒したと唱えた『宇宙市民』的感覚も覚ええない。(私は過去へと旅することに慣れている。そのせいだろうか？それともこれから地表に帰りここの6倍の重力に縛られ、人の欲望に翻弄される生活へと戻ればその感慨が浮かぶのだろうか？)

物思いに沈むウインの目に、地球は鮮やかに青く、美しい宝玉石と映っていた。

「お客様、失礼ですが、こちらのお客様とご相席、よろしいでしょうか？」

どの位物思いに沈んでいたのか、いつの間にかロボットではない

人間のウェイターが現れぺこりと頭を下げる。

「ああ、構いませんよ」

「申し訳ございません」

「どうぞこちらに、お客様」

「ありがとうございます」

長い黒髪を掻き揚げながら20代後半から30代と思しき女性がワインに微笑む。

彼女は丁寧にお辞儀をすると、ウェイターが恭しく引き出した椅子に腰掛けた。別の、これはロボットのウェイターが跳ねるように飛んで来て、オーダーを尋ねる。

「シャンパンを」

空かさずワインが、

「私にもお代わりを」

シャンパングラスに蓋をしてストローで飲む、と言うのは実に滑稽で味気ないが、グラスを意識せずに持ち上げると、ふんわりと零れ落ちてしまうのでは仕方がない。シャンパンが届くと、彼女は初めてだったのか戸惑いがちに蓋をされたグラスから飛び出すストローを軽く摘んだ。

中肉中背、長い黒髪に同じく虹彩の見えない黒い瞳、身体は無駄のないスリムな体型だが華奢ではない。内にはねを秘めている。小さなテーブルを挟んで彼の正面に座った彼女は、そんな東洋系の美女だった。ワインはシャンパン・フルートタイプの輝くグラスを見つめて呟く。

「バカラの高級品に蓋をしてストローを差す。実に滑稽ではありませんが」

彼女が何か？と顔を上げるのを確認すると、

「仕方がありませんね、乾杯をする度に半分になってしまいますから」

自然と乾杯のグラスを掲げたワインは彼女にそう言って笑い掛ける。彼女も笑いながら、

「シャンパンをストローで啜る、というのも初体験ですわ」

「ええ、私も今夜が初めてですよ」

「では、貴方も宇宙は初めて？」

「ええ、恥ずかしながら。貴女もですか？」

「はい。恥ずかしながら」

即妙に彼の言葉で返す彼女の屈託のない笑いは、東洋系の彼女がするととてもエキゾチックだ。照度を落とした有機EL照明に、重力に抗してふんわりと踊っている黒髪。切れ長に僅かに上目を使う瞳。どちらも艶やかに光る様はまじまじと見つめてしまいそうな誘惑を覚える。その黒い瞳が彼の姿を映していた。と、彼女は、

「こうしてご相席させて頂いたのも何かの縁ですね、お名前を伺っても宜しいですか？」

一瞬偽名を使おうか、と考えた彼だったが・・・。

罰則こそないが、TPでは正直に所属と姓名を名乗る必要のない時は、偽名と当たり障りのない会社員とすることが暗黙の了解だった。しかし、こんな場所でそれは神経質に過ぎるだろう。彼ら作戦部の現業組は国際協約機関の職員名簿にも載っていない。無闇に職業を明かさないでいる限りは大丈夫なはず。それでも彼は告げる直前、最小限度の用心はすることにした。

「ピーター・ヴィンスラムです。」

自分の名前を称号の『ド』を抜いて世界標準読みにする。本名には違いあるまい。

「ユンファ・マーチンと申します。」

彼女は軽く頭を下げると、

「ヴィンスラムさんは何をなさっていらっしゃるの？」

「しがない商社勤めですよ。やれアジアだ、やれ北米だと世界中行ったり来たり」

「それは大変そうなお仕事ね、ヴィンスラムさん」

「どうかヴィンとお呼び下さい。普段はそう呼ばれています」

「では、私も、ユンファ、と」

ウインは胸に手を当て恭しくお辞儀をすると、

「ではユンファさんと呼ばせて頂きましょう」

ユンファも優雅に一礼すると、

「グインさんは紳士ですね。EU（ヨーロッパ連合）の貴族でいらして？」

「まあ、紳士かどうかは別として貴族の末裔であることは確かです。しかし、家柄は大したことはありません。私も准男爵に過ぎませんので、お気になさらず」

「まあ。本物の貴族の方にお会いするのは久しぶりだわ」

「失礼ですが、ユンファ、とはどういう意味で？」

「蛍をご存知？」

「ええ、知ってますよ。一度南米で光の柱を見たことがあります。あれは美しいものですね」

「そう、あの小さな光る虫。それと花」

「ホタルの花。実に美しい名前だ」

「お上手ね」

「本心で言っているのですよ。漆黒の闇を思わせる髪の毛とその瞳。それが艶やかに光るさま。あなたにぴったりの名前だ」

「本当に女が舞い上がるような。それ以上褒めないで下さいな、恥ずかしいわ」

彼女は笑って手で彼を遮る仕草をする。透き通るように白くしみ一つない手が黒いテーブルの上で舞った。

「アジアのご出身で？」

「いいえ、生まれも育ちも北米です」

「では、貴女のご両親はアジアの美をそのまま貴女に受け継がせたのですね」

「美はしまつて置いて下さい。確かに両親ともアジアから北米にやって来た移民です。私は両親を良く知りませんの。北米に渡って私が生まれ、いくらもしない頃に2人とも事故で他界しました。私は3歳でした。幸いにも親戚が私を引き取って育ててくれたのです」

「どうも不躰な質問を・・・お許し下さい」

ウインが頭を垂れるとユンファは、

「私こそこんなに素晴らしいひとときに無粋な身の上話など・・・
ウインさん、貴方は何をしに月へ？ご商談ですか？」

「いいえ、完全なプライベートです。珍しいことに1ヶ月の長期
休暇が取れましたので、兼ねてより考えていた宇宙へと思い至りま
してね。リゾート型のスペースコロニーも中々良いと勧められまし
たが、どうせなら月へと思いました」

「そうでしたか」

「貴女は？ユンファ」

さり気なく呼び捨てにしてウインが聞く。彼女はシャンパンを一
口啜ると、

「私もプライベートな旅行ですわ。月は」

と彼女は窓の外、陰影を深く刻む荒涼とした月面を見て、

「私の亡き夫がこよなく愛した場所でした」

ウインはその先を待ったが彼女は続けるつもりはない様子で、じ
つと窓を眺めている。彼は一人シャンパンを飲み干すと、常に客の
様子をさり気なく目立たぬように窺っているウエイターの一人に合
図する。幸いにもそれは半数づつ配置された人間とロボットのウエ
イターの内、『生の』方で、ウインがさり気なく左手人差し指で頭
をこつこつと叩くと、はっと立ち止り、これもさり気なく頷いた。
十秒ほどその状態が続くと、ウエイターは了解の印に深々とお辞儀
をして去る。

「ところで、いつ月にいらっしゃったのです？」

ウインが話し掛けると、物思いに沈んでいたユンファは視線を窓
から離して、顔を赤らめる。

「これは失礼致しました。おとといですわ。ガガーリンググレードで
検疫の足止めをされた後、直ぐに連絡船に乗って。だからまだこれ
のお世話にならないと、怖くて」

彼女は黒いドレスの腰に装着した無粋な装置に目を落とす。確か

にシックな装いが台無しになる。

「全く厄介ですね。仕方がありませんが、私もこうしてご厄介になつていますよ。座る度に腰が浮ついた気分になるなんて、まるで下校直前の学童のようだ」

「それは悪戯っ子なこと」

彼女は笑うとテーブルの上で両手を組み合わせる。

「貴方はいつから？ ウィン」

こちらも呼び捨てとなった。彼は内心ニヤリとしたが顔に出さないよう注意しながら、

「一週間になりますね。あつという間ですよ」

「何か見所はありました？」

「そうですね」

ウィンは自分が見て来たこの1週間の月の様子を、身振り手振りを交えながら話した。最初はガガーリンググランドでの月面ジャンプ。観光船に乗って初めて眺めたクレーターが続く風景。20世紀、最初に人類が降り立ち、その人物の名がこうして街の名前となっている着陸地点観光。そこに立ててあった星条旗はレプリカで、本物はノースポールの『カゲヤ』、月・自然と歴史博物館にあるという。

地球の出は地球と月との自転の関係で月面から観察することは出来ない。観光船から見た地球の出は息を飲むほど美しかった。彼が荒涼とした月面から姿を現せた青い地球のありさまを思い入れたっぷりに話し、ユンファが感心してテーブルに肘を立てて手を握り合わせた時、頭の中に囁かれた。

「お客様、ご用意が出来ました」

「グッドタイミングだ。頼む」

それはマイクロタグと呼ばれる生体送受信機、マイクロチップの魔術。脳幹に埋め込まれたいわゆる電脳体で通信・情報取得などが携帯端末と連動して行なえる。ウェイターは彼からの指示を受け、ある用意をしていたのだ。

ウィンはさり気なく、

「ユンファ、お食事はまだ？」

「ええ、お昼にシリアルバーを齧っただけですわ。そろそろ身体の線も考えないといけないうちになつてしまいました」

「それは大変だ。そんなにお美しいのは、やはりご本人の努力あつてのことなのですね？」

ユンファはただ美しいだけでなく、何かスポーツかトレーニングを積んでいる。ウインは最初からそのことに気付いていたが、質問はしなかった。女性の外見を褒める時は抽象的なこと、美しいやら優雅だやらに限る。コンプレックスというものは、他人には美と映る部分に存在することもある。

「努力なんて。皆さんと同じ、ジムとプールで少し汗を流すだけですわ」

それは少しではないだろう。目立ち過ぎないように身体を鍛えている。筋肉や身のこなしを見れば、それが体型維持を目的としないことはプロのウインには見て取れた。それも格闘や護身の類と見る暴漢の一人くらいは自分で何とでも出来るほど。そこまで考えたウインは、その先へ思考が流れるのを意識して止めた。こんなタイミングで野暮の極地だ、と雑念を振り捨てる。

「でも、軽いものならお召し上がりになりますよね？」

「ええ、少しだけ。お食事抜きではさすがにお腹が空いて夜起きてしまいますもの」

「失礼致します。お食事のご用意が出来ました」

先ほどのウエイターが恭しくお辞儀する。

「ああ、失礼しました、お食事を予約されていたのね？今夜は楽しかったわ、ウイン」

するとウインはきよとんとして、

「おかしいですね、食事は2人分、会話はまだ途中ですよ？そうだよな、ウエイター君」

「はい。この上階、グランダイニング、地球が見えるお席、お二人様ご用意してございます。メニューは本日シェフお勧めのディナー。」

本日のアミューズ、アントレは手長海老と帆立貝柱のオマール海老ドレッシング仕立て、スープはカブの冷製ポターージュ、ポアソンはスズキのポアレ・ジンジャー風味のマッシュルームピューレ添え、グラニテはフランボワーズ、ヴィンヤードは鴨胸肉のソテー・茸のアンサンブルトリュフソース、フロマーージュに続きましてデザート、カフェ・ウ・テ、となります」

ウェイターはさらりと言つてのける。ユンファは眉を顰めて、「でも……」

「いや、ご一緒させて下さい。どうかお願いします」

ウインは大胆にも彼女の右手を取つて引き寄せ、その甲に唇を当てた。彼女は抗う様子もなく、またそうした紳士に慣れていたものが、堂々と受けたが、答えた声にはまだ戸惑いが残った。

「私、そんなに食べられませんわ」

「一人分は量を半分に、と言つておいたでしょうか？」

「承つてございます」

もちろん、そんな指示は出していない。こいつ、中々出来る、とウインは内心笑う。心付けを更に増やさなければならぬだろう。

「まあ、全て計算ですね。貴方の商才が透けて見えましてよ、ウイン」

「お褒めと承諾の印と承りました、マダム」

ユンファはやれやれと言つた様子で小さく吐息を吐くと、

「降参よ、ウイン。でもフロマーージュから先は勘弁してね」

「それは食後のお話も含むのでしょうか？」

ウインの言葉に含まれた失望を感じたのだから、彼女は悪戯っぽく瞳を輝かせる。

「それはお食事を頂きながら、考えて置くわ」

ダイニングの雰囲気も食事も申し分なかった。さすが月でも最高級のホテルで、素材は地球からの直送品、チーズもワインもフランス人のワインですら頷けるものだった。これで先ほどの段取りに要

した心付けを含めて、ウインの少なくともない給料半月分だったが、美女と美酒を前にそんなものは些細なこと。彼は窓の外に下半分を影にして浮かぶ青い星を眺め、また、ワインに顔をほんのりと桜色に染め、彼の話を興味深く聞いている透き通るような白い肌の女性を見て、密かに満足するのだった。

やがて夜も更け、軽い重力のせいばかりでなく足元がおぼつかなくなった頃、席を立った二人は、声を潜めて話しながら客室に向かった。ウインは時折忍び笑いをする彼女の肩をさり気なく庇いながら歩いていった。

「本当に楽しかった、ありがとう、ウイン」

「どういたしまして、マダム」

するとコンファは突然思い出したかのように、

「そうだったわ、私、明日からのこと、何にも考えていなかった。

ねえ、ウイン。このホテルのコンシェルジュは有能かしら？」

「有能だろうね、今までのホテルの様子を見れば」

「そう。でも、心配だわ。最初にもっと確実な方に相談しようと思うのだけれど、案内してくれる？」

「お望みとあらば」

ウインはまるでボーイのように先に立ち、ある部屋まで来るとドアを開け、彼女を先へ、と手を伸べ促す。

「ありがとう、ボーイ長さん」

「どういたしまして」

2人の笑いはドアが断ち切った。

4：逢瀬（前書き）

ご注意

この章には性行為自体は描かれませんがそれに類する表現が描かれております。R15の趣旨に沿った対応をお願い致します。

なお、この章を飛ばしましても物語を読むことが出来るように作者は工夫する所存です。

4：逢瀬

アームストロングシティ/アーケティック・ホテル 同年紀

有機EL照明は最小に絞られている。オレンジの点光源が辛うじて物の輪郭を浮かび上がらせる。闇に慣れた目にはちょうど良い。ウインは仰向けに寝転びながら両手を上に、すると擬似窓が開く。これも青白い亡霊のように照度が抑えられている。午前2時10分。素早くウィンドウを閉じると両手を頭の後ろへやり首を落ち着かせる。

ホテルの客室には時計がない。誰もが生体送受信機マイクロタグに連動する携帯端末携帯を持つ現代、固定式の時計自体が時代遅れではあるものの、客に時間を忘れて寛いでもらおうという意味サインでもある。もちろん頼めば直ぐに付けてくれるが、ウインは頼まなかった。普段彼は『時間』に関わる仕事をしている。こんな時ぐらい時を忘れたかった。しかし、やはりこうして時間を気にしてしまう。

最初は月にしては広いと感じた個室も、こうしてみるとやはり狭い。仕事で彼が使う隊舎の4人部屋と同じか、それよりやや大きい程度だ。その部屋に乱れた呼吸の音がしている。彼はそれを聞きながら、じっと天井を見つめていた。

「素敵だった。情熱的で、お上手で」

呼吸が落ち着いたユンファが呟く。

「熱心なのにお優しく。女の扱いに慣れていらっしやるのね」

何か華奢な動物が細く鳴くような笑いを漏らすと、

「地球ではさぞお忙しいでしょう？夜も」

ウインはシーツを剥がさないよう気を付けながら半身を起こすと、「そんなことはありませんよ。随分と久しぶりだったので。私は少しせつかちで身勝手でしたね。ありがとう、ユンファ。あなたも素晴らしかった」

彼は身を屈め、俯せに横たわる彼女の肩に唇を付けた。

「でも不思議ね、あなたのような古風で立派な紳士がお一人なんて、
そこで彼女は再びあの小動物の笑いを漏らし、

「それともあなた、稀代の結婚詐欺師か何か？」

ウインは苦笑すると、

「女たらしに見えましたか、それは面目ありませんでした、マダム」

「冗談よ。気になさったのならごめんなさい」

「気にはしませんよ」

「ウイン、その傷、どうされたの？」

彼女はウインの右胸に薄いピンクのケロイドとして残る傷を見つめる。

「再生治療が失敗したのかしら」

24世紀、遺伝子操作とバイオテクノロジーによる形成外科治療は手足・耳朶眼球の欠損、内臓の摘出、火傷や皮膚病などによる皮膚の損傷などに苦しむ患者に光明を与えた。今や手指の欠損なら100%の残存組織で完全に再生可能で、人類は義手義足などから解放されている。もっとも、軍事的には強化外骨格や武器としての義手・義足の開発も盛んだが、それはこの話と関係は無い。

「いえ、これは」

ウインはその傷を左手でなぞりながら、

「ノスタルジー、ですよ」

「思い出、なの？」

「ええ。自分を忘れないためにね」

1870年の夏。泥濘の中で死ぬはずだった彼。それはプロイセンの一騎兵が振るった槍が掠めた痕。倒れた彼には、他十数箇所にかサベルや槍による傷があり、銃創も2箇所にあったという。瀕死の彼を救った24世紀の医療チームが、その殆どを再生治療で傷跡も残さずに治した。一番軽く命に別状の無いこの傷だけが残り、医師は跡形も無く傷を消せると請け負った。しかしウインはそれを断り、以来、この傷だけが19世紀の名残となっている。

「酷い傷ね、何かで裂かれたような。一体何をしたらこんな傷が残るの？事故か何か？」

ユンファは興味深げと呼ぶには異様なほどの興奮を示すと半身を起し、露になつた乳房も隠さずにそつと右手を伸べて、彼の右胸の傷に沿つて指を這わす。頬に流れる黒髪の奥に隠れた目は精気に輝いていた。

「まだ十代の頃、少々無茶をしましてね。もうそんなことはしない、という戒めです」

「喧嘩か何か？」

「気になりますか？」

「あ、いえ、ごめんなさい、変なことを聞いて」

ウインは曖昧に笑つて彼女の髪をかき上げる。これ以上探らせぬため、少々乱暴に唇を奪いながら、この人はやはり加虐の性癖があるな、と思う。

傷に興味を示す女性は確かにいる。過去にウインもそういう女性に出会つたことがあつた。全てがそつとは限らないが、傷に興味する女性は暴力やスピードに興味を持つことも多い。人は期せずしてセックスに本性が現われることがあるが、彼女の場合先ほどの営みの中でもそれが見え隠れしていた。多分彼の背中には赤い爪痕が数箇所残つているはずだ。行為の最中に彼女は、無意識だろうが拳を固めて彼の胸や腕を殴り付けていて、彼が押さえ付けなければ青い打撲の痕すら残つただろう。それをこの人は気付いていないようにも見える。

情報部で勤務した経験のある彼は精神医学も多少は齧っていた。何かトラウマに近いものがこの人にはあるが、もちろん非常にデリケートな問題であるし、それを彼女に尋ねる理由もない。そんなことを考えながらの長いキスになつた。気付けば彼女は息を乱し、夢中になつて彼にしがみ付き、夢中になつて彼の舌を吸っている。ウインはそんな彼女を優しく抱きかかえ横たえた。

十数分後。

「ごめんなさい。私、まるで淫売みたいに・・・」

「いいじゃないですか、我を忘れるというのは幸せなことですよ。それに重力が少なくて身が軽いというのはこういう時には中々便利ですからね」

「いやだ、ヴィンつたら」

彼女は笑いながら彼の胸板に頭を預ける。長い髪を指で梳きながら、彼は彼女の甘い香りを吸い込んで目を瞑る。暫くそのまま余韻に浸っていたが、やがて彼女を左手で支えながら右手側に擬似窓を開き、いくつか操作する。突然豪華ホテルの一室が月面の上になった。

「まあ、すごい」

彼女は身を起こしベッドの上から360度どこまでも続く荒涼とした灰色の世界を見やる。

「どうやったの？」

「ホテルの案内にありましたよ。火星やコロニーから見た宇宙空間もあるみたいですが、やはりここは月ですからね。地球でも同じ趣向の3次元動画がありますが、やはりこの軽い重力の世界で体験すると、臨場感が違いますね」

「本当。本物の月の上にいるみたい」

「どうですか、明日にでも本物の月面散歩でも」

「え？素敵だわ、どうするの？」

「ガイドを雇えば、個人でもそういうことが出来ると聞きました。

朝になったらコンシェルジュに任せましょう」

「楽しみだわ」

そう言うと彼女は起き上がってロープを取る。彼の視線を意識するとクスリ、と笑い、

「ハーフタイム」

黒髪を躍らせて部屋の奥、今は月面の一部と化したバスルーム行く。ベッドのウィンから見ると彼女は、月のクレーターに転がる斜

長石の大岩に呑まれ消えたように見えた。

ウインは擬似窓を開き、『会社』のIDとパスを入れ、個人IDとパスを重ねる。2次元の音声無しでページを繰り、必要項目を打ち込む。月からのアクセスなのでセキュリティ解除に手間多く掛かり、また通信遅延ラグも発生する。キーワードと特徴を手入力で打ち込み、回答を得るまでに思いのほか時間が掛かった。

擬似窓を閉じるとほぼ同時にユンファがバスルームから出て来た。彼女はベッドの脇にあるキャビネットのクーラーからミネラルウォーターのパックを2つ取り出して一つを彼に渡す。月面から忽然とそれが現われる。出来の良いマジックだ。

「ありがとう、マダム」

ユンファは上機嫌で、

「お酒の方がよろしくて？」

「いいえ、もう十分に頂いておりますよ、マダム」

「あなたは本当に古風な礼儀正しさを持つ方だわ、ウイン。まるでルイ王朝の時代にお生まれになったみたい」

ウインは苦笑しながら意識して過敏に反応しないよう努めた。ルイ王朝が幕を降ろし紆余曲折を経た後、ナポレオンの甥が統治するフランス最後の帝政時代に青春期を過ごしたウイン。下級貴族とはいえ、あの時代の空気を吸った者としての矜持は十分過ぎるほど持っているつもりだったが、それは他人にひけらかす類のものではない。また、彼の所属するTP・時空保安庁が実施する過去からの人材調査は公然の秘密でもあった。自分が過去からスカウトされた『過去人』であることは簡単に認めていい類のことではない。

「過分な褒め言葉です、マダム。先祖が喜んでおりますよ」

ウインはユンファの手を取って唇を押し当てた。彼女は鷹揚にそれを受けて、

「女が公然とちやほやされたのは近代まで。現代は性ジェンダーではなく人間ヒューマンとして立たなくてはなりませんもの。貴方のように接して頂ける方は本当に少ないわ。いつもそんなにお優しいの？」

「女性むすめによりますよ、ユンファ。この手の行為は侮辱と受け取る方が多いですからね。もちろん貴女でもプライベート以外でこのような接し方は致しません。私は女性を尊敬すべき対象と教えられ育ちました。誤解を招きかねませんが敢えて言わせて頂くのなら、性差ジェンダーは恥じたり忘れ去るべきものではないと思つたのです。いくら男女差を埋めるハイテクノロジーが満ち溢れた現代にあつたとしても」

彼女は手を叩く真似をする。

「素晴らしい。フェミニストという言葉は死語ですけど、貴方にふさわしい言葉ですわ」

そして手を伸べ、均整の取れた彼の身体に触れ、指を滑らせる。

その指が彼の頬の上で止まる。

「貴方は現代の雄オスが忘れた美德を誇つていいわ。誰もそんなことを言わなかったのなら、私が言つてあげる」

すると彼女の指は首筋をなぞり胸を辿つて降りて行く。

「でも、単に優しく礼儀正しいだけで女は惹かれなくてよ」

鳩尾から腹筋で締まった腹を滑り、臍を過ぎ、軽く吐息を漏らしながら彼女の指は目的地に辿り着くとそれをやや乱暴に愛撫し、上気した顔で彼の目を見る。

「あなたの雄を証明出来て？ピーター・ヴィンスラム」

「お望みとあらば、マダム」

翌朝、ウインが何かの気配に目を覚ますと、彼女の姿がバスルームに消えるところだった。3次元の月面は自動的に消えていた。擬似窓を開き時間を見ると7時を少し過ぎたところ。2時間程度の睡眠だったが気分は良かった。情事の相手としてユンファは素晴らしい存在を示した。才能豊かな淑女で機転が利き、初々しさに溢れる乙女にも、技巧に長けた淫乱にもなれた。夜中に会社のデータカンパニー閲覧システムを介して覗いた『27から35歳くらいのユンファ・マーンと名乗る女性』の該当者は4名いたが、その何れもが彼女の外見的特徴と一致しない。もちろん整形も考えられる。密かに彼女

の画像を検索に掛けることも出来たが、それは時間が掛かるし興味の範囲を超えている。彼はもうそれ以上調べる理由がなかったし調べたいとも思わなくなっていた。彼はローブを羽織ると擬似窓を開き、ホテルの案内を呼ぶ。

「お待たせしました、おはようございます、フロントです」

「朝食は部屋で取りたい。A23号室のユンファ・マーチンさんと一緒に食べるので彼女の分もこちらへ頼む。ああ、直ぐに彼女に確認させるから」

「畏まりました。事前にお聞きしたメニューでよろしいでしょうか？」

「構わない。それとコンシェルジュへ回して貰えないか」

「暫くお待ち下さい」

ほんの数秒後、別の女性が現われる。

「おはようございます、ウインスラブ様。コンシェルジュのシエフチエンコです」

「申し訳ないが私のことは標準語読みにして頂けるとありがたい」

「大変失礼致しました、ウインスラム様でよろしいでしょうか？」

「結構だよ、ありがとう、シエフチエンコさん」

「ありがとうございます。何かご希望がございますか？」

「月面を自分の足で探索してみたいのだが、ガイド付きで何かプランがあるかな」

「ございます、ご予定はいかが致しましょう？」

「出来れば今日、昼前が。2人分だ」

5：タクシードライバーと天体観測者

アームストロングシティノアークティック・ホテル前 同年紀

「お待たせしやした、ヴィンスラムさん。今日、案内させて貰うジヨルダーノ・ブルーノという者で」

「よろしく、ブルーノ。こちらはご一緒するマーチンさんだ」

「よろしく、マーチンさん」

「よろしく、ブルーノさん」

「通信システムは大丈夫かね？よく聞こえ、よく見えてるかな」

「ああ、大丈夫だ」

「私も大丈夫です」

「注意事項は確認したね」

「ああ、した」

「しました」

「繰り返しになるが、マイクロタグやピーシーは使用禁止。通信障害や安全装置にトラブルが発生する可能性があるからね」

二人が頷くと、バイザー内側に投射された二次元画像の顔が笑みを浮かべ頷く。

「出発の前にもう一つ確認したいことがあるだがね、ヴィンスラムさん」

「何だね？ブルーノ」

「車のことだけんど」
あし

ブルーノは右手でバギータイプの6輪車両を指し示す。

「指示通りオープンタイプでいいかね？密閉式はこがたの車でないと帰りますで宇宙服を外すことが出来ないよ」

「何か問題でも？」

「いや、別にお宅さんたちがよけりゃいいがね。二人とも宇宙は初めてって言うから、宇宙服に慣れてないだろうと思って。長時間そ

れを被つてるとおかしくなつちまう人もいるんでね」

ブルーノは二人の出で立ちのことを言っている。ボディフィット型の軽装宇宙服ではあるものの重さは10キロ余り、重力が軽いため厚手の防寒服くらいにしか体感しないが問題はフルフェイスのヘルメット。バイザーは超クリアに精製した衝撃に強いナノカーボン製で、月面居住区の窓の素材と同じもの。外側に断熱と遮光剤が塗布してあるので、外から表情は何えない。作業を伴わない観光客が使うものは視野の範囲内が全て透明素材で、慣れない人間にも閉所恐怖や息苦しさを出来るだけ軽減するような工夫がなされている。それでも馴染めない人間はいるものだ。

「いや、二人とも大丈夫だ。彼女も私も地球でスキューバを経験している」

「ああ、それじゃあね。済んませんね、この間も大丈夫と言ってたお客が途中でゲロしちまってさ、酸素の出口を塞いじまって一騒動でさ」

「そのようなご迷惑は掛けないとお約束いたしますわ、ブルーノさん」

ユンファが柔らかく笑むとブルーノは深々とお辞儀をして、
「ありがとうございます、助かるよ。じゃあ、そっちがよければ、ぼちぼち行くかね？」

口の利き方は良くないが腕は確かな案内人、とコンシエルジユのシェフチエンコ女史が太鼓判を押したブルーノは、確かにプロフェシヨナルを端々に漂わせる月面ガイドだった。月面散策一日コースのルートはアームストロングシティの郊外にあるマストライバーの発着場遺跡の見学から始まった。ホテルから15分、硬化レゴリス舗装の道を慎重に運転するブルーノを見て、ウインは無意識に身構えていた態度を改める。ドライブの腕をひけらかすためにスピードを上げたり蛇行運転をするような馬鹿者ではない。見える風景や建物をぶつきら棒に説明するときも、どうやら視線を逸らせたりはし

ていない様子。そこでウインは最後に残った疑問を口にする。

「ところで、ブルーノ。何でオートドライブにしないのかな？」

すると彼は鼻で笑って、

「何でも機械任せにするとだね、いつかそのツケが回ってきますわな、ウインスラムさん」

「それは良く分かるが、ここは『街中』だろ？交通管制は地球並みとガイドダンスで聞いたが」

ブルーノは突然後席のウインを振り向くと、運転はそのまま、ゆつくりと話しかける。

「もう忘れちまうほど長い間降りてないから『下』^{ちきみ}じゃどうだか知りませんがね、旦那。ここでは法規なんてもんはどこ吹く風って奴が多くてね。国際協約機構^{きょうやく}は隠したいみたいだけどマニュアルでブツ飛ばして大破、なんてしょちゆうですよ。こっちはお客さん預かってんで、いざって時には何故がおかしな動きをするオートなんかに頼ってられんですよ。お分かりですかね？旦那」

その間もバギーは道を真っ直ぐに走って行く。前方から密閉型の4輪車がやって来てかなりなスピードですれ違つと、ウインの隣に座るユンファが身動きした。ウインは冷静に頭を下げると、

「済まなかった。あんたがプロだつてことが良く分かったよ。もう何も言わないから、どうか私たちを無事に帰してくれ」

「そいつは請け負いますぜ、ウインスラムさん」

ブルーノは再び前を向くと何事もなかったかのように、この地に最初に建設された観測基地の遺跡について説明を始めた。ユンファが聞いてくる。

「ウイン？」

秘話モードで音声が多少歪んでいても声に非難が含まれているのが分かる。

「あまりプロの方のプライドを験するのは、どうかしら。少しドキドキしましたわよ」

「申し訳なかつた、謝ります。少々疑問だったのですよ。もうやり

ません」

ウインは肩を竦めてブルーノの話に聞き入った。

街の周囲に広がる様々な遺跡やレジャー施設を6輪のバギーは辿って行く。マスドライバーは月面開発初期に大型資材や月の鉱物を送り出すために使われたリニアモーターカタパルトだった。現在ではウインも良く知る時空ドライブと同じ原理を応用し、短距離発着可能な輸送機に取って代わられ、マスドライバーは殆ど使われなくなっていた。既にアームストロングシティのマスドライバー発着場は閉鎖されていたが、月面開発の初期に造られたこの機構は歴史的価値があり、実際全長2キロのカタパルトは壮観な眺めで史跡として保存されていた。最初は観測基地としてスタートしたこの街も、『アルテミス』には及ばないが8千の人口を誇る。滞在型ホテルや近郊にレジャー施設を抱える観光都市に成長したこの街では低重力状態で楽しむプールやゴルフに人気があり、例のムーンボールは毎晩試合が行なわれる。ウインはジムで身体が鈍らないようにする程度でスポーツを験す気にはならなかったが、ブルーノが月で一番大きなプールだと示したドーム型のプールを眺めた時は、隣で興味深げに眺めるユンファを盗み見て、彼女と一緒に泳いでもいいかななどと邪なことを考えたりもした。

やがてバギーは新鮮な野菜を供給する生産工場を後にすると、人造物が途絶え、比較的平坦に広がる場所に出た。

「すごい」

思わずユンファが呟くほど、そこは見通しがよく、宇宙に輝く星は地球で見るそれとは比較にならないほど明るく数が多かった。二人とも、それまでも往還船や観光で星を見て感嘆の声を上げてはいたが、このように開けた場所で見ると、小さな窓や人造物に囲まれて見るよりは数倍感動の度合いが違った。ブルーノは少し小高くなった場所にバギーを止めると、

「さあ、ここで暫く休憩しやしょう。おや、水をあまり飲んでない

ようですな、いけないね、ここで全部飲んでくださいよ奥さん。おしつこのことを気にするより水分補給を心がけて。こいつを着ていると思つた以上に汗をかいてるんで簡単に脱水症状を起すんでね。飲んだらタンクに補給するから」

「分かりました、ブルーノさん」

水や流動口糧（じゅうどうくわう）はヘルメットから口の横へ突き出しているチューブから採る。ユンファは素直に水を飲んでみせた。

「まあ、確かに慣れるまではいい大人が化学処理式のオムツをしてるってーのは気になりますわな、だが我慢してもらわなきゃなりませんよ。遠出の場合はこの状態で4、5日行動することもザラだからね。これが宇宙の現実つてやつですよ」

「確かに思つていた以上に不便で大変ね。ブルーノさんは何年月にいらつしやるの？」

「は！忘れちまいましたよ。聞かれた時には20年つて答えますけど、それ以上ですな」

「そんなに長い間。地球が恋しくならなくて？」

「さあ、どうなんでしょうね。もう地球がどんなだったのかあまり覚えていないからね」

「あそこに人がいる」

ワインは目敏くそれを見つけた。所々に岩が転がる平坦な月面に、岩と紛う人影が小さく見えた。何かの機器を隣に、身を屈めている。

「ああ、あれ。天体観測をしてるんですよ」

「学者さん？」

「いいや、趣味ですな、奥さん」

「素敵な趣味ですこと」

「それはどうですかね」

「え？」

「口が滑つた、聞き流してくれませんかね、奥さん」

バイザーの内側に映るブルーノの顔は何か浮かぬ様子だ。それが気になつたワインが声を掛ける。

「ちよつとあの人と話してみたいが、邪魔かな？」

「ええ、邪魔ですな」

その反応の素早さが益々ワインの興味を引いた。

「それは問題がある、ということかい？ブルーノ」

「そういうことだね、旦那」

どうやら気分を害したり触れて欲しくない事柄に及ぶと、名前から『旦那』と言い方を変えるブルーノにワインは畳み掛ける。

「なあ、ブルーノ。それじゃ説明になっていないよ。あの人のことをあんたは知っている様子だが、我々が話してはいけない相手なのか、それともあんたが話して欲しくないのか、その辺をはつきりして貰えないか？話し掛けたらあの方の迷惑になるならそう言っつて貰わないと。そうなのかね？」

「ああ、話さない方がいいでしょうな」

「それはあんたがそう思うのかい？それとも何かあの方に問題があつて私を止めようとしているのかい？」

「どっちでも同じでしょうが」

「違うよ、ブルーノ、同じじゃない」

ブルーノは思わず悪態を吐きそうになるのを舌打ちで我慢すると、
「分かったよ好きにな、旦那。あの人はちよつと変わつてるんだ、旦那が不快な思いをしてもこっちは責任取りませんぜ」

「結構だ。ああ、ブルーノ？」

「なんです？」

「最初にあんたがあの人に声を掛けてくれないか？」

「え？」

「こちらは名前も知らないし、知り合いなら話をする気分かどうか探れるだろう？あの人と話す気分じゃないのならこっちは退散するから」

「・・・へいへい、そうしやしょう」

ブルーノはぷいっつとあちらを向くと、すたすたと歩いて行く。大股で歩くブルーノの足元から月の砂レゴリスがふわりと舞い上がり

きらきらと輝いた。ウインはユンファを促すと少し遅れて彼の後を追った。すると振り返りもせずブルーノが言う。

「ライネケン」

「なんだい？」

「あの人の名前、ライネケンという。でもいいですか？先生と呼んで下さい。機嫌を損ねないでくださいよ、相当な気分屋だから」

「こんにちは、先生」

ブルーノはライネケンが何かの装置に屈み込んでいる場所のかなり手前から声を掛けた。しかし、相手は聞こえなかったのか装置を弄くり続けている。

「先生、お邪魔して済みません、ちょっと手を休めて頂けませんかね」

通信機を切っているのだろう、相手は全く反応しない。ブルーノはウインの方に振り返ると、そら見たことか、と両掌を仰向ける。ウインが仕方がないと一歩踏み出した時。

「勝手にそれ以上近付くんじゃない、コワッパどもが」

皺枯れて聞き取り難い声が響く。

「一体何の騒ぎだ」

「お邪魔して済みません、ブルーノですよ、先生」

「ふん、分かるとるよ、車屋。オイルの臭いがここまでぶんぶんしとるからな。で、何の用事かと聞いておる」

「申し訳ないです先生。ウチのお客さんが先生とお話したいのでアタリを付けてくれと言うんで・・・」

「ほう？で、お前を指名したおめでたい客に何を言ったんだ？頭のイカした男が砂漠の真中で空ばかり見てる、面白いからからかってやれ、とでも？」

「と、とんでもねえ、先生、そんなこたあ言っちゃいねえですよ」

「じゃあ何か？占星術の大家だから手相でも見て貰えとでも言ったのか？後からいくらふんだくるつもりだペテン師め」

「先生、あんまりだ、俺はそんな男じゃねえですよ」

「ブルーノ」

ウインは笑い混じりに割り込む。

「この方はあんたをからかっているだけだ。そんなにマジになるともないだろうよ」

そしてこちらを見もしないライネケンに、

「本当に申し訳ありません。私はヴィンスラムと申します。この地へ観光に来た者です。あの丘から先生のお姿が拝見出来ましたのでブルーノさんに先生のことをお聞きしたのですよ。天体観測をなさっている、と聞き及んだので、少しお話を伺ってみたいと、無礼は承知で無理を言ったのです。お邪魔でしたらこれで」

「先を急ぐな、フランス人。さっさと用件を言えばよかつたんだ」

「何故私をフランス人と？」

「とぼけるならそれでも構わん。そちらのご婦人は中国の方だがアメリカ生まれだな。この能天気が言ったかどうかは知らんが、この車屋はイタリヤで悪さをして月に逃げて来た甲斐性なしだ」

「また先生、人聞きの悪い・・・」

青くなりながらも媚を売るブルーノを完全に無視したライネケンは、

「話があるならとつとこつちへ来い」

ライネケンは腰を伸ばすと振り返る。

「では、お言葉に甘えて」

ウインが全く動じた振りを見せないさまにライネケンは目を細め、すくすく退散するブルーノと入れ替わる形で前に出たコンフアに視線を移す。

「おや、これは」

150センチほどの小男、ライネケンが腰に手をやり、

「知ってるぞ、どこで会ったか・・・いや、あんたじゃないな」

ぶつくさと独り言を言うなり、ぶつきらばうに奇妙な装置の向こうを指差す。

「二人ともそこへ座るがいい」

それは太古、月の地殻変動で生成された白っぽい斜長石で、よく見ると窪みを2つ付けて並んで腰掛けることが出来るベンチに設えてあった。ブルーノは、と振り返ると盛大にレゴリスを巻き上げて自分の車の方へ去って行く。ウインは、そのまま彼らを置いて帰ってしまうのではないか、と思ったが勿論そんなことはなく、ブルーノは車に乗り込むとそのまま運転席で待ちの態勢になったのが見えた。

「星を見ていられるんですね。趣味とお聞きしましたわ」

「ユンファが無邪気に尋ねるとライネケンはそっけなく、

「何をしているように見えたかね？」

「その機械は何ですか？」

彼女が興味深げに装置を見ているので、ライネケンも少し鎧を脱いだ。

「こいつか？これは観測機器だ。一種の光像増幅器イメージアンプだよ。直接アタマにリンクさせる。視覚を全てそいつに繋ぐと、宇宙を飛んでいる気分を味わえる」

「それ、素敵ですね。私にも出来ますか？」

「そいつは無理だ。何せコイツの信号シグナルは生身の身体には強過ぎる。脳がフライになっちまうのさ」

空かさずウインが尋ねる。

「では、何故あなたには出来るのです？」

「ライネケンはふん、と鼻を鳴らすと、

「分かっているのに聞くんじゃないよ、若造」

「分かりませんわ」

と、これはユンファ。ライネケンは突然フルフェイスのヘルメットと頸部を繋ぐシールドを外す。ユンファが驚く間もなくヘルメットを脱いで手に持った。

「ライネケンさん・・・」

思わず手を合わせたユンファの前に現われたのは、目出し帽そっ

くりのマスクをした艶消しのメタルで出来た頭。

「あんまり長い時間は脱げない。使用環境の上限は摂氏485度になってるが、熱いのは一緒だからね。あまり見栄えのする顔じゃないんで、覆面をしているのさ」

「いつからですか？」

静かにウインが尋ねる。

「さあね。100年経ったかどうか・・・交通事故でね。まだマスドライバーで輸送機を打ち上げてた時代に管制コンピュータが誤作動してね、わしの乗った連絡艇に巨大な鉱物輸送機をぶつけやがった。30名ほど乗っていたわしのフネは大破したまま軌道から弾き飛ばされ、3日ほど宇宙空間を彷徨った。助かったのはわしだけだ。何故助かったなどと聞くなよ若造。わしも覚えていないことは答えられん。悪運が強いだけだろう」

ライネケンはつるりとしたアタマを撫でると、

「まあ、助かったとはいえ、全身火傷に脳損傷、臓器は滅茶苦茶、心臓は停止でね。バラバラになっていなかった唯一の身体だったんで医者が直す気になったそうだが、当時の最新サイボーグ技術を使って。元の身体で残っているところは脳幹だけだ。そいつもコピーして電脳に組み込み込んだから、記憶と個性だけがあるロボットのようなものだ。その後何度もパーツ更新したから当時の筐体すら残ったところはない。今はピッカーとかいう高知能学習型のロボットが大手を振って歩いてやがるから、それとわしの違いはどこにあるのかね？医者は験しかかったただけだろうな、当時最新のサイボーグ施術をやってみたかっただけに決まるとる。余計なことしやがって。妻も息子も宇宙の塵になったのに、お陰でわしだけ生き永らえておる」

6・カスタネダ

ノースポールカウンティ
月面・北極域ノームストロングシティ近郊 同年紀

見知らぬ旅人に突然の身の上話。偏屈そうで猜疑心が強そうに見えた老人が打ち明けた悲劇的な過去に、ユンファは言葉に詰まりウインは裏を読もうとする。すると、観測装置の前に置かれた斜長石で出来た椅子から当の老人が、

「そんな顔をするでないよ、二人とも。溢れんばかりの同情と本能的な猜疑と。全く人間てえのは木星に到達しようがカエサルやアレクサンダーに会いに行けるようになるうが、なーんも変わらん。ちつぽけな頭で考え、ちつぽけなことしか理解しない。すぐ顔に出て本性が現われる」

ポーカーフェイスを気取ったつもりがこのざまだ、とウインは苦笑する。無表情で有名な上司を見たらこのセンセイはなんと言うだろうか。そんな下らないことを考えるとウインは、

「降参ですよ、先生。なるほど我々の生体送受信機とご自身の電脳「コンピュータをリンクして感情の起伏を手繰たくつてらっしゃるのですね？こちらが見ていた先生の画像も虚像だったし、我々の心の動きは丸見えだ。

『生身』は安全装置や通信障害を恐れタグを起動出来ない。しかし先生にはそれが可能。いや、この過酷な土地で暮らすには便利でしょうね」

幾分の皮肉が混じったウインの言葉にライネケンは鼻を鳴らすと「ふん、今度は怒らせようとするか。ブルーノがほざいたんだろうが、先生などと呼ぶな、ライネケンでいいわい。やはり心理操作をなまじつか齧つとる奴は鼻持ちならないな。悪いがこちらら感情などというものは簡単にオンオフ可能だ。もちろん恣意的にはそれは出来ないがね」

「感情を機械的にコントロール出来るのですか？ライネケンさん」
ユンファが恐る恐る聞いた。するとライネケンは随分穏やかな口調で、

「勿論だとも、お嬢さん。但し手順を踏まないかね。たとえば、思わず相手を張り倒しそうになる、自分を見失う予兆が現われたとする。一定の条件下でそういうことが起これば、電腦は怒りや自棄的な行動に繋がる感情を制御するようプログラミングされている。これはあんたらが良く知っているピッカーとか言うロボットも同じ仕組みと聞ぐが、当然といえば当然だね。私が我を忘れてあんたらを襲えば、銃器でも使わなければ停められはしないだろう。失礼だがそこのお兄さんでも苦労するだろうよ」

「苦労しますね。腕をへし折られるくらいならマシで、本気で掛かけられたら首を捻じ切られそうですね」

ウインがこともなげに言う、ライネケンは初めて笑った。

「荒事にも慣れておるか。軍にいたな？」

「そんなこともありましたね」

「まあよい。素姓を知ったところで何の意味もない」

ウインはそれには釣られず、ちらつと宇宙を見上げると、

「あなたは毎日ここで宇宙を？」

ライネケンもふと見上げると、

「毎日ではないが、気が向いた時はいつでもな」

彼は手に持っていたヘルメットを被り直す。丁寧に首の周りをシールドすると立ち上がり、

「熱くなつて来たんでね」

言い訳がましく苦笑を滲ませたのは、二人を受け入れた証拠だろうか。ライネケンは後ろ手を組んで、ゆっくりと行きつ戻りつを始めていた。

「見る。この摂氏100度の砂漠。月は静寂に包まれた無慈悲な場所だ。天然由来の生物は一切存在しない。人間は何故こんな場所に街を築き住み始めたのかね？人口問題も環境問題も乗り越えたよう

に見える人類が、必要もない侵出をする。確かに過去滅ぼされた数^あ多^{また}の文明や動植物に似た存在はこの地にはない。劣悪な環境は滅ぼすべき弱者をも排除する」

先生とは言い得て妙だ、とウインは思う。こうなる以前、ライネケンは本当に教師だったのかもしれない、と彼は思った。

「しかしだ。過去人間は劣悪な環境への挑戦を止めたことがない。辺境やら秘境、未知なる大陸や大海。犠牲は省みず乗り込んでいった。名誉か。黄金か。征服欲か。そうやってフロンティアは先へ先へと延びて行き、果てが宇宙と過去だった」

ライネケンは行きつ戻りつを続け、その姿に往年の若き教師の姿が重なり、ウインは得心するのだった。

「過去は聞くところによると絶対限界があるらしい。その先へ行けぬという時空の壁が。宇宙も然り。今のところ千光年単位での到達は人類には不可能だろう、と言われる。だが、『過去』への限界が絶対的なものであるのに比べ、宇宙のそれは技術的なものだ。いつか人類は易々とその壁を乗り越えてしまいうだろう。そう思わせるものが人間の欲にはあるのだ」

そこでライネケンはぴたりと立ち止る。少しの間動かずに何を考えていたのか、やがて装置の前へ行き、先ほどのように斜長石の椅子に腰掛ける。ウインは続きを待ったが、彼は黙したまま動かなかった。ウインのモニターには目を閉じ顔を上向ける老人の顔、ライネケンの偽像が映っている。

「あの、よろしいでしょうか、ライネケンさん
ユンファが尋ねる。」

「何だ？」

「月は……この場所には何か人を惹きつけるものがあるのでしょうか？」

ライネケンは顔を上げると、

「開拓精神云々という人間の本能以外にか？」

「具体的に仰って頂けたのなら、私のような浅学の者にも多少は分

かるかと思うのです。あなたの感じるもので構いませんので、私に教えて頂けませんか？」

ウインは横に座る女性が何か必死になっているのに気付いた。同じ思いをライネケンも抱いたのだろう、興味深げに、

「どうしてそんな戯言を知りたい？」

ユンファは何かを言いかけ、止め、また何かを言いかけたが言葉が出ない。そんな彼女を見やりながらライネケンは、

「まあ、いい。私がこんなことをしている理由にも繋がる。たいしたこともないが・・・宇宙そふを見上げてみる」

二人とも宇宙を見上げる。

「地球においては空気という保護膜シールドが自然を守る。しかし同時にこの宇宙を隠してしまう。青い空、白い雲。無論、夜となれば青いカーテンは開かれ、宇宙が覗くのだがそれは厚い空気の膜を通してのもので、真実ではない。もう一つ地球は重力井戸の底にある。月にもそれはあるが、地球に較べたら軽いものだ。地上では下とは地面だ。それが空を飛ぶことで漸く下にも空間を得る。これだけでも人間の精神には飛躍だが、それが重力井戸を脱し宇宙空間に出た途端、上下の感覚が消失する」

星の配列は月も地球も変わらない。オリオンはオリオンでカシオペアやサソリもそのWやSの形を見せる。しかし、その量は圧倒的だった。銀河は数倍明るく輝き、闇の黒さは底がない黒。ここからは見えないが、地球の青さには息を飲む。

「宇宙空間と較べれば月の人間も地球のそれも地面の上。しかしここは地球より数倍宇宙に近い場所だ。スペースコロニーの方が距離的には近いと言えるが、あちらは地球環境に似せた住空間、実際は月面よりはよほど地球に近い。往還船や星間連絡船などは密閉された空間だが、ここには開けた世界がある。その意味で、月は宇宙を感じる最適な場所と言えるのだろう」

「ライネケンさんは、そこに魅力を感じてお住みになっているのですか？」

ユンファが問うと、ライネケンは、

「そうとも言えるが、そう言い切れない部分がある」

ライネケンは身を乗り出すと、ユンファをいきなり指差し、

「なあ、あんた。この先を知りたいのなら、それを知りたい理由を
言え。一体何を知りたいんだ？」

「私は・・・私の・・・」

「外そうか？」

ウインが口を挟むと、ユンファは頭を振り、

「構わないわ。いえ、ちゃんと話します」

彼女は座りなおすとライネケンに、

「私は最近、夫を亡くしました。夫は年に1回、2週間ほど休暇を取って月に来ておりました。しかし必ず一人で出掛け、私は結婚して5年、一度も連れて行つて貰ったことはありません。彼は、結婚前からよく月に来ているようでした。月から帰つて来ると、いつもお土産を買い込んで、行く前よりも、何と云うのか、安らかな様子でしたので、私は浮気を疑って調査を依頼したのです。でも、実際は艶めいたことには無頓着な人でしたので、内心は一体月で何をしているのだろう、という興味の方が強かったのだと思います」

彼女の声が掠れ、彼女は水を一口飲んだ。

「済みません、調査は有能だと評判の興信所に頼んだのですけれど、彼が帰つて来て2週間後に報告を貰うと、実に意外な結果でした」

彼女は両手を膝に置き、手を拭うような仕草を繰り返す。やがて話し出した声は一段と低かった。

「彼は月に入ると直ぐに北極域の同じホテルに滞在し、出発の日までその街を動かない、というのです。毎日同じ時間にホテルを出て、同じ案内人を雇い、同じ郊外の開けた場所に来て一日中空を眺めていた、といいます。何をしている訳でなく、ただ寝転がって宇宙そふを見ていた、と。調査した人はそのホテルの従業員や案内人を探りましたが、何もおかしな点は出て来なかつたそうです。ホテルでは誰とも接触はなく、それは毎年同じだったといいます」

男は10年前に初めて月へとやって来た。その年は普通の観光客と同じにあちらこちらを見て周り、帰って行った。翌年、昨年一週間ほど滞在したホテルを予約した彼は、郊外で星が見たいから、とホテルのコンシェルジェに頼みベテランの案内人を雇った。彼はその日から一週間、毎日その初老の案内人を頼んで、郊外で宇宙を見続けた。男は翌年もやって来て、同じホテルに泊まり、同じ案内人を雇い、同じ場所で星を眺めた。その翌年、更に次の年も。その後、ホテルは彼のために毎年決った一週間同じ部屋をリザーブし、案内人は同じ一週間で予約済みとした。そしてそれは年中行事のように続いて行った。

「私はそれでもその案内人が怪しいと思い、再調査をお願いしました。でも、出て来た彼女の経歴や普段の生活からは、彼との接点や彼が好意やら興味を惹かれそうな点は一切出て来ませんでした」

女は地球で輸送ホバーのドライバーをしていたが、ある重大事故に巻き込まれ、下半身を失った。再生治療では完治不可能だったので、半身をサイボーグ化した。上半身との整合性の問題で後遺症に悩んでいた、と言う。医師の勧めで身体に負担の軽い月への移住を考える。同じ宇宙でもスペースコロニーには地球並の重力があり、各ステーションでは彼女のような資格を必要としなかったからだ。彼女は地球を捨て、月へと移住する。

「月では最初、運転手として働き始め、やがて案内人となったそうです。無口な方で人付き合いも最低限だったらしく、彼女を知る人は少なかったようですが、運転の腕は確かで口は堅いとの評判があり、お忍びで月散歩を楽しむ著名人などを案内していたと聞きます。彼を連れて行く時も会話はなかったそうで、彼が宇宙そらを見上げている間も離れたところで本を読んだり寝ていたそうです」

調査員が会いに行つた時には彼女も死期が近かつた。上半身で残つた臓器に悪性の腫瘍が見つかったが、その時には広範囲に転移していた。もちろん臓器は人工品に換装出来るし、金を掛ければサイボーグ化も可能だつた。しかし、彼女は尊厳死を選択し宣言した。国際協約地域に居住を許可された人間には法令でそれが認められていたので、医師は彼女のカルテを静かに閉じると、鎮痛剤のアンプリルだけを処方した。

普段の彼女を識る少数の人間が知つたら驚いたろうが、調査員に彼女は様々なことを語つた。彼女には結婚歴があり離婚後相手に引き取られた子供が一人いて、地球を去る時に生き別れになつたことも判明した。調査員が特記したのは彼女のユンファの夫に対する印象で、中でもユンファの心に突き刺さつたのは「彼はとても孤独な人だと思ふ。男女の違いなく誰からも愛される人だし、事実ホテルの使用人にも丁寧で人気もあつたが、人からの好意は受けても人は愛せない、愛する芝居をしているように見えた」という感想だつた。調査員は所見に彼女の多弁を「第三者に自分の存在を遺したいという気持ちは、死に臨んだ者が発作的に抱く当たり前の反応である」と記していた。彼女は2ヶ月前に亡くなつている。

「私は、彼の気持ちを知りたくて」

ユンファは俯いたが、ウインが伸ばした手を優しく遮り顔を上げ、「この地に来たのです。同じホテルに泊まり、同じように星を眺めてみようよ……でも、それでも迷つていました。偶然にもこの方と一緒出来、月面を歩かないかと誘われたので、踏ん切りが付いたのです」

ウインはユンファを哀れんだ。今までの話に嘘はないだろう。では昨日の行き擦りの行為は、と思うが、それも彼には痛いほど分かつた。

彼にも好意を抱いた女性がいたが、一人は過去の世界で生き別れ、

もう一人は恋愛感情など微塵も許されない厳しい生き様を歩む女だった。人は寂しい生き物だ。望んでも与えられないものは代用するしかない。それが出来ない一途な人間もいるが、彼もユンファも現実的な人間だった。それでも何かの拍子に後悔の念が浮かぶもの。ウインは彼女の様子を窺ったがそんな感じは受けなかったので少々ほっとしていた。彼女は、自分を愛しているものとはかり思っていた男の本当の気持ちを知ろうと足掻いているのだ。

「残念だが」

ライネケンがゆっくりと言う。

「わしはあなたの旦那が抱いていた宇宙観など分からんな。そういうものは極めて個人的精神的なもので、人によつては神秘的ですらある。確かにわしも宇宙そふに惹かれ毎日のように見ておるよ。この傀儡の身体となつて肉体と頭とを切り離されたお陰で、わしはここから宇宙に飛び立ち漂うことが出来る。しかし、あなたの旦那は『生身』だったのだろう？」

彼女はゆっくり頷くと、力なく項垂れる。

「まあ、生身であつてもこの土地は地球の数千倍、感性が高まる場所だ。あなたの旦那は何か悟りのようなものを得て、それを体感するために月を訪れていたのかも知れないがね」

「それは・・・私のようなものでも感じる事が出来ると・・・思われますか？」

彼女は俯いたままか細い声で尋ねる。

「さあ、どうだかね。こればかりは自分の問題だからな。他人がどうのこうの言えるもんじゃない。但し、あなたには、難しいかもしれないがね」

「何故でしょう？」

「激しい怒りや恨みが見えるからだよ」

ウインはライネケンを睨む振りをしてユンファの様子を確かめた。モニターに映る顔は自失しているようにも見える。

「何に恨みを持つかは知らんし、それが何者だろうとわしの知った

ことではないが、恨みや怒りを抱く者にとりこの感覚は、到底理解の及ぶものではないだろう」

ライネケンは再び宇宙を見上げ、

「底の浅い欲望や深い憎しみ、そして恐怖など雑念は全て宇宙との語らいには邪魔となる。全てに限りがある世界の象徴なのだよ、そういった雑念はな。宇宙には限りがない。ああ、人間から見れば、だがね。超越した存在には限りがある宇宙が見えているのだろうか」

「超越した存在？神ですか？」

ずっと黙っていたウインが口を挟み、彼女の話から流れを逸らす。

「ふん。その言い草には棘があるな。お前無神論者か？」

「そんなことはありません。これでも機会があれば教会にも通いますよ」

「人知の及ぶ範囲の外にあるものは、神と呼んでも差し支えないだろう、違うか？」

「それでは人類とは違う進化を遂げた異星人や、過去から見た未来人も神格化されてしまいますが」

「ピサロを最初は神として迎えたインカのように、か？そうだ、人類は偏狭な己の外にあつて明らかに自己より優れたものを神格化する。この世で全自動化技術が神格化されているようにな」

「宇宙でもそれが当てはまる、と」

「感じないか、お前は。宇宙そこに出て」

ウインは黒々とした天を見やる。大気圏内より数倍強烈な光なので見つめてはならない、と言われた太陽を見る。途端にバイザーに保護が掛かり、視界がサングラスを掛けたようにグレーに染まる。

視線を外すとバイザーは元に戻った。太陽が出ているのに夜の世界。いや、地表は砂レゴスで輝いているのだから、昼であるのは確かなのだが「脅威を感じますよ。おこがましいですが、この風景が見慣れた理解の外にあるのは確かですし」

ライネケンは喉を鳴らして笑うと、

「それが第一歩だ。なあ、その先へ突き抜けると、どうなると思

う？」

「その先とは？」

「さつきも言ったが。精神世界だ」

ウインは俯きながらも聞いていっているように見えるユンファを意識しながら、

「もう少し具体的な話をお聞かせ願えませんか？」

「ふん。この先は禅問答になるよ。それも億劫だがな、そもそも真理なるもの、私は心得てもいない。そんなものは徳の高い坊主か何かに尋ねるのだな。だから何時まで経つてもお前らの求めるものなどに到達はせんぞ？ 一体私に何を求めているのやら。それは知らんが、私とて肉体を切り刻んで元の骸むくろからは似て非なる者と変わり果てた男だ。根本的にお前らとは違ってしまっている」

ライネケンはその所で大きな吐息を吐いた。それが本人にも意外だったのか、暫く言い淀んだ後で屈み込むと、レゴリスを両手で掬う。「わしが良く聞く宇宙生活者の体験を一つだけ教えてやる。わしもそれを感じるが、まあ、解釈は人それぞれだ。いいか、もう、これしか言わんぞ」

「是非にも」

「こうやって意識を宇宙に漂わせるとだな、ああ、生身ならこのように独り宇宙を見上げたり宇宙遊泳をするのだ。自分が本当に何者でも、本当に小さな存在だと強く意識するようになる。この砂のようちにちっぽけで一見無価値な存在だ、とな」

そう言っただけはレゴリスを両手から零す。それは砂煙となって漂いながら散って行く。

「全てが偶然の産物で、地球すら、いや太陽系すら小さな存在、そんな風に。そうすると今度は、何故自分が存在するのだろう、と考える。偶然に偶然が重なり、自分の存在がある、とな。理解は一瞬にして訪れる、という。私は少し時間が掛かったがね。何物もその存在に意味を成さないものはない、と考えるようになる。全てが予定調和の中に収まり、有機も無機も、偶然の産物など一つもないの

では、と感ずるのだ」

ライネケンは身を乗り出すと

「それが神さ。人によっては幸福感に包まれ、死を恐れなくなると言う。立派な宗教だな。だから、負の感情に支配された者は、その位置に辿り着くことが至難なのだ」

彼は両手を見つめると、今までになく真剣な物言いで、

「その怒りすら、ちつぽけだ、という悟りを得ることも可能かもしれない。人知を超えた宇宙は人それぞれに答えを出す。人間が月に棲むようになってまだ200年余り。本当に人間は変わるのかもな」

ウインはぼんやりと考える。ひよつとしてライネケンはユンファの夫と会っているのではないだろうか。彼が最初に月へとやって来た時、ウインとユンファのようにして出会い、宇宙を眺めることに何かを見出す話をされて。そう考えれば納得出来る部分もある。その20世紀の作家カスターナダが語るような体験が、彼を月へと誘っていたのでは、と。

俯いて両手で自分の上腕を抱き締めているユンファを見やり、ウインは静かに言う。

「ありがとうございます。我々にとっては意義のある話だったと思います。お邪魔しました」

ライネケンはそれを聞いた素振りも見せず、呟いた。

「本当に、ここには何も無い。あるのは砂漠と宇宙だけだ。人間の存在など塵芥だ。開拓など世迷言だ。皆、彷徨っているだけだ。しかしもう遅過ぎる。元には戻らない」

ライネケンは装置に屈みこみ、装置とリンクした電腦は空を彷徨い始めたのだろう、そのまま動かなくなった。ウインは黙って一礼する。頭を上げるとユンファに歩み寄り、屈み込むと優しく両肩に手を掛ける。暫くそのまましていると、ユンファは自分の手を解き、彼に項垂れかかると宇宙服の様々な装置が邪魔になるのも構わず、両手を背中に回そうとした。そんな中途半端な体勢で2分はそうしていただろうか、やがてユンファは無言で立ち上がると、ゆっくり

とブルーノの待つ小高い丘へ歩いて行った。ウインは彼女の足取りがしっかりしていることを見届けると、今一度ライネケンの後姿に目をやってからユンファの後を追うように歩き始める。

「若造、知っていたか？」

皺枯れ声が耳に響くとウインは立ち止るが振り返らない。

「全身の90%以上をサイボーグ化した人間は寿命が決められていることを」

「知っていました。140歳だそうですね」

「やはりお前は紳士だな、本物の。生まれは・・・19世紀か・・・お前も彷徨っているんだな、自分の本来の死に場所を遠く離れて・・・いや、そうでもないか。幸せな男だ、全く」

くくく、と笑い声が響く。

「私はまだ20年ほど生きて行かねばならない。例の感情制御で自殺も出来んのだからな。94年前に死んだはずが生かされて、ずっと生かされて・・・」

「さようなら、先生」

ウインが呟くとライネケンはまだ笑いながら、

「お前は幸せな男だな、うらやましいよ」

ウインはもう立ち止まらなかつた。その耳に歌うようなライネケンの声が追いかけて来た。

「幸せな・・・本当に幸せな・・・」

エピソード

月面・国際協約機構直轄・ガガーリングレード

2374年07月（現在年月）

「お客様、地球へお帰りですよろしいでしょうか？」

出迎えたのはポーターロボット。古風なベルボーイの格好をして、右腕に『地球行旅客専用』と書いた腕章をしている。彼らの仕事は、エントランスロビーで客を捕まえては正しい手続きで地球へ帰還させる手伝いをするというもの。荷物の発送手続きから乗客の健康診断や出立手続きまでを乗客に代わって処理、サポートする。月を出る手続きは結構煩雑なので、慣れた者も利用するサービスロボットだった。

「ああ、16時30分発グロスユニバース91便だ」

「GUV091便ですね。お荷物をご用意出来ましたか？」

「ホテルから直行させている」

「チケットと貨物預り証をお預かり致します」

ウインは擬似窓を開いて地球行きのチケットと直送貨物請負証書を表示させるとロボットに投げる。ロボットは左手でキャッチすると、

「確認致しました。ピエール・ド・ウインスラブ様、1名でございますね」

「そつだ」

「こちらへどうぞ、ウインスラブ様」

ロボットは彼の先に発つてロビーに行く。月に3つある旅客用宇宙港のうち最大のガガーリングレード^{スペースポート}宇宙港。午後の発着ラッシュを迎え、宙港は行き交う人々で混雑していた。到着便の客は検疫兼月環境慣習ガイドランス用施設へ隔離されるため、ここにいるのは地球へ向かう客と、ラグランジェポイントのうち4つに造られたスパー

スコロニーへ向かう客だった。地球へ向かう客はグループ毎にポーターロボットが付いているので目立っている。

2つある待合室は彼と同じように地球へ向かう旅客で溢れていた。「では、手続きをして参ります。お待ち間にこちらの問診票にチェックをして署名頂けますでしょうか？」

ロボットが示す擬似窓を受け取ると、ウインは黙って頷く。

「では、擬似窓に映ります指示に従って下さい。同時に検温と簡易ウイルス検査も行ないますのでご了承下さい」
「分かった」

「私はガンマ23号です。何かございましたら擬似窓に表示されましたコールボタンを押して下さい。それでは手続きはおよそ30分かかります。問診票をクリアしながらお待ち下さい」

特徴のない20代男性を模したロボットは一礼すると去って行った。ウインは擬似窓を開けると表示された32項目の質問に真面目に答えて行く。

彼女はあの翌日、何も告げずに姿を消した。

口数がめつきり少なくなったブルーノに、砂漠からホテルに直行するよう命じると、彼は二人を予定より3時間早くホテルへ帰した。

「ありがとう、ブルーノさん」

ウインが言うと、

「どういたしまして」

営業用のスマイルに戻ったブルーノがお辞儀する。ユンファは黙ったままお辞儀をすると、そのままホテルの外来者用気密エントランスの重い扉の前に立つ。ウインとブルーノは扉の中に消えるユンファを見送ると、どちらともなく軽く息を吐いた。

「あの先生が何か酷いことを言ったんで？」

ブルーノは何か疲れたかのように問う。

「酷くはない。ごく、当たり前のことを言っていたように思うよ」

「それにしちゃ、言っちゃあなんですが大変な災難にあったような

様子じゃないですか」

「当たり前が結構響くこともある。あの人に罪はないよ。先生もあの女性むすめもね」

「まあ、悪い思い出にならなきゃいいですよ。折角の旅行なんですから」

「そうだな。多分大丈夫だろう。すまなかつたな、色々言ってしまうって」

「いいえ、こちらこそ。あの先生はちょっと苦手なんですよ」

ウインは鷹揚に手を振ると、ふと思いついたように、

「そう言えば、ブルーノ。君は最近病気で亡くなった同業者の女性を知っているかい？」

「女性？ヘルガのことかな？60くらいで右腕に薔薇の刺青がある？」

「まあ、名前も様相も知らないがね、下半身をサイボーグ化していて、ガンを宣告されても尊厳死を選んだそうだが」

「じゃあ、やつぱしヘルガのことだ。ふた月ほど前に死にましたが、彼女がどうかしたんで？」

ウインは首を振る。

「いいや、ちよつとね。それとこれはあまり広めて欲しくない話だが、彼女の客で、毎年決った時にやって来てはあの先生のように宇宙を眺めていた男性がいたそうだが、何か聞いたことはあるかい？」

「へえ、その話、半年前にも聞き捲くつてた奴らがいたな。ウチ等の間ではちよつとした噂になった。まあ、直接は知らないが、ヘルガってヤツは無口な女でしてね。何でもヘルガの客で毎年この街にやって来ては、宇宙そらを眺めていた人がいたそうで」

「その人はさっきの先生と知り合いかな」

「どうですかね。そこまでは知らねえけど。まあ、シュミが似ているなら何か繋がりがあるかも知れねえが、聞いた話じゃその男の人は、さっきお連れした砂漠とは街を挟んだ反対側にあるクレーターあで見ていたそうですがね。確かに星だけを見るなら地面が眩しい砂つち

漠より、日陰があるクレータークレイターの方が向いてるわな。今日はご婦人連れだと言っんで足元がしっかりしてる方へ行きやしたが、向こうの方がよかったかな？」

ブルーノが興味深げになって来たのでウインは切り上げることにする。

「いや、今日の方でよかったよ。あの先生にも会えたからね。ああ、そうだ、料金はこれでいいかな？」

ウインは生体送受信機マイクログケを活かして最初に告げられた金額の2割増をブルーノに伝える。ホテルが目の前なのでもうタグを使っても大丈夫だろう。

「いや、コースの半分しか回ってないし、そんなに。まあ、お客さんの都合で帰ったんで満額は頂きてえとこですが」

「いいんだよ、不愉快な思いもさせたしな。取っといってくれ」

「そうですかい？じゃあ遠慮なく」

「ありがとう、楽しかったよ」

ウインは宇宙服の腕を伸ばして握手を求めるとブルーノはがっつりと握り返して上下に振った。

「また月に、『アームス』へお出での際はジョルダーノ・ブルーノをご指名のほどを」

「ああ、そうするよ」

「では、これで。旦那、良い旅を」

「君も元気でな、ブルーノ」

その日の残りは部屋に帰って1回15分間1日3回までと制限のあるシャワーを浴び、ベッドに横になって過ごした。一度ユンファの部屋へ内線を掛けたが擬似窓には『不在』の文字が出るばかりだった。

『夕方』6時には正装してラウンジでシャンパンを啜ったが、ユンファが出てくる様子はなかった。ウインはクラブサンドを頼んでその場で軽い夕食を済ませ、日付が変わるまで青く美しい半円の地球を眺めて、物思いに耽っていた。

夜中の2時。着信の音で目を覚ましたウインは、闇に青く光る擬似窓に「開けて頂けますか」の文字を見て、素早く身を起こすと口ブを羽織り部屋のドアを開けた。

ユンファは黒いイブニングドレス姿で立っていた。ウインが一礼すると彼女は軽く頷き、黙って部屋に入った。ドアが閉まるなり彼女は背中へ手を伸ばし、古風なドレスの留め金を弾くように外す。パサリと落ちたドレスの下、彼女は一糸も纏っていないかった。そのままウインのベッドへ行くと、今まで寝ていたウインの場所の隣の毛布を持ち上げ、肢体を潜り込ませる。ウインも黙ったままベッドへ行くと彼女を見下ろした。彼女は黙ったまま黒い瞳で見つめ返す。ウインはそつと屈んで彼女の唇に唇を重ねた。沈黙は何よりも物語る。直後、伸びて来た彼女の両腕に首を掴まれ、半分引き擦り倒されるようにベッドに沈んだウインはそんな警句を思い浮かべ、後は彼女のペースに任せて行為に没頭した。

翌朝、目を覚ますと彼女は消えていた。職業柄、どんなに疲れていても傍らの動く気配で目を覚ます自信はあったが、彼女が明け方に帰った気配を彼は感じなかった。思っていた以上に彼女はしたたかだった、と彼は思う。擬似窓を開くが、「朝食のご連絡をお待ちします」というホテルのメッセージだけが光っていた。ベッドで遅い朝食を一人で食べながら、ユンファの部屋の内線を繋ぐが『空室』の文字が躍っただけだった。そのような予感もしていたので、彼は擬似窓を閉じ、そろそろ慣れて来たパッケージのコーヒーの残りを啜って飲み切った。

アークティックにはその後3日間滞在し、4日後には次の滞在地へ向かった。その目的地、直径85キロメートル余りのクレーター脇に作られた地下式のコロニーは完全な観光都市だった。

地球から一旦、パーツ毎に軌道上へ打ち上げ、地球を周回しながら組み上げた巨大な円筒形の居住シールドにブースターを付けて月まで運び軟着陸させる。直径300メートルの円筒を月面に埋めてレ

ゴリスで覆う。こうして出来上がった6つの円筒形ブロックを繋いだ直径300メートル長さ6キロメートルの空間を、人は近接するクレーターの名を採って、月のレジャータウン『ティコ』と呼んだ。彼は残りの10日余りをこの街で過ごしたが、長期の航海クルーズに参加する社交性のある妙齡の男性ならこうであるうという行動の見本を示した。即ち、利用出来る限りの楽しみを思う存分楽しんだ。10日ばかりのティコでのバカンスで、彼はカジノで少しだけ損をして、月では最高の美食で1キロほど体重を増やし、月で作られた葡萄酒を主原料にしたその名もバツカスという名のワインを験し、ルールが単純で攻守の激しい球技、ムーンボールの魅力を知った。ティコでの10日間でユンファとのエピソードも随分と影が薄くなつたが、後で振り返ってみれば、彼の月旅行での一番の思い出と言えば、やはりユンファと過ごしたアークティックホテルでの2日間ということになるのだろう。

結局、ウインにはライネケンやユンファの夫が感じたであろう劇的瞬間は訪れることがなかった。彼はティコからガガーリングラードムンツレーンへ向かう連絡船から月面を見やりながら、自分と彼らとの違いを思った。

愛する人と別れ、その思い出の中で多分唯一だろう謎を探ったところ、愛されていたという現実が幻と化してしまい、己の抛り所を失った女。瀕死の身を救われ、妻子を失ってただ独り、予定外の生を歩まざるを得なかった男。片や傷付いた心を抱え月を彷徨い、片や己の抛り所を宇宙に見出し、その暗黒の空間に彷徨う。

しかし、ウインは絶望も救済を求める心も持ち合わせていない。彼はライネケンやユンファとは根本から違っていた。己の生まれた過去から切り離され、独り未来へと召還され、困難な任務を押し付けられたとはいえ、彼の心は平静だった。いつしか任務は彼の信念となり、仲間は家族と同義となった。同時代に生きた人間は無に等しい、形は孤独の中にあるとはいえ、それに心乱されたこともない。ライネケンの見定めた通りだった。彼は実に幸せな男だったのだ。

「お客様、お待たせしました。問診票の記載はお済でしょうか？」
ぼんやりと出発客を眺めていたウインの前に『ガンマ23』が立っていた。

「ああ、全部書いたよ」

「ありがとうございます。お手続きは全て無事に終わりました。お荷物も通関を終えています。貨物料金はお客様の携帯端末でご確認出来ます。暫くお待ちを」

そう言うとガンマ23はウインの擬似窓に自分の左人差し指を当て、暫く動かなかつたが、やがて、

「ありがとうございます。お客様の健康状態が確認され、地球へのランディングダウンが許可されました。GUV091便は定刻通り月時間16時30分の出発です。現在15時55分。往還機へのチェックイン16時、後5分となります。出発の10分前、16時20分までには必ず機内のご自分の席にお座り下さい」

「ありがとうございます」

すると、まるでその言葉を待っていたかのように耳に心地よい女声のアナウンスが届く。

「大変お待たせ致しました。ガガーリン発第2スペースステーション行きグロスユニバス91便にご搭乗予定のお客様、間もなく搭乗手続きを開始致します。出発ゲートナンバー11へお出で下さい。なお、ご利用頂きましたポーターロボットはその場にて捨て置き下さい」

ロボット『ガンマ23号』はプログラミングの指示に従い、若い男性が形作る最高の微笑みを具現する。

「ウインスラブ様。月滞在は楽しまれましたでしょうか？」

「ああ、存分に」

実際はスクリーンの窓、静寂に包まれる灰色の荒野を見やっつて彼は言う。

「随分と昔、出版されたばかりの奇天烈な本を読んだことがある。

砲弾に乗って月へ飛んで行く話だ。私は人馬が重なり斃れている戦場を照らし出す月を見上げながら、今直ぐ本当に行けたのならどんなにか素敵だろう、と思っただものさ」

お客の想定外の行動にもきちんと対処出来る学習機能を持っているとはいえ、ガンマ23号はほんの1秒ほどウエイトした。

「・・・はい」

「ヴェル又氏に見せてあげたかったね。彼は長距離砲で月に行く考えを示したことでマストライバーの元祖とも言える。しかし、未来はもっと先へ進んだ訳だ。この有様を見たら彼はきつと改訂版を出したことだろう」

彼は何の話か理解出来ず曖昧な笑顔を浮かべたままのポーターロボットに笑い掛ける。

「しかし、空想はSFのままでいるのが一番光り輝くに決っているんだよ」

ウインは「ありがとうございました」とお辞儀するロボットを後に、足取りも軽くコンコースを11番ゲートへ向かって歩いて行った。

FIN

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0246i/>

ウィンの月世界旅行

2010年10月8日15時53分発行